

平将門

幸田露伴

青空文庫

千鍾せんしやう

の酒も少く、一句の言も多いといふことがある。受授

が情を異にし 遊んだはうてい 篷底の夢の余りによしなしごとを書きつ

けはしたが、もとより人を酔はさう意こころも無い、書かずともと思つ

てゐるほどだから、読まずともと思つてゐる。たゞ宿しゆくすゐなほ 酔猶

残つて眼の中がむづゝく人もあらば、羅山が詩にした大河の水ほ

ど淡いものだから、却かへつて胃熱を洗ふぐらゐのことはあらうか。

飲むも飲まぬも読むも読まぬも、人の勝手で、刀根とねの川波いつ

もさらつく同様、紙に鉛筆のあたりはうだい 傍題。

六人箱を枕の夢に、そも我こそは桓武くわんむ 天皇の後こういん 胤に鎮守府

將軍良將よしまさが子、相馬の小次郎將まさかど 門なれ、承平天慶のむかしの

恨み、利根の川水日夜に流れて滔うら 《たうく》汨 《みつく》
千古経れども未だ一念の痕あとを洗はねば、 《そもく》何に胚はいた
胎いしてゐるのであらうか、又抑何そもを語つてゐるのだらうか。たゞ
其の驍勇げうゆう慄悍へうかんをしのぶためのみならば、然程さほどにはなるまいで
は無いか。考へどころは十二分にある。

心理から事跡を曲解するのは不都合であるが、事跡から心理を
即断するのも不都合である。まして事跡から心理を即断して、そ
して事実を捏造ねつざうし出すに至つては、愈 《いよく》以て不都
合である。日本外史はおもしろい書であるが、それに拠よると、将
門が在京の日に比叻ひえいの山頂に藤原純友すみともと共に立つて皇居を俯瞰ふかん
して、我は王族なり、当まさに天子となるべし、卿は藤原氏なり、関

白となるべし、と約束したとある。これは神皇正統記やなぞに拠つたのであるが、これでは将門は飛んでも無い純粹の謀反人^{むほんにん}で、其罪逃るゝよしも無い者である。然しさういふ事が有り得るものであらうか。楚^その項羽^{かうう}や漢の高祖が未だ事を挙げざる前、秦^{しん}の始皇帝の行列を觀て、項羽は取つて以て代るべしと言ひ、高祖は大丈夫^{まさ}応に是の如くなるべしと言つたといふ、其の史記の記事から化けて出たやうなことだ。二人の言ですら、性格描写として看^みれば非常に巧妙であるが、事実としては、史記に酔はぬ限は受取れない。黄石公を實在の人として受取るほどに読まれてしまへば、二人の言を受取らうし、大鏡を信仰しきつて、正統記を有難がればそれまでだが、どうも史記の香がしてならない。丁度将門乱の

時の朱雀帝頃は漢文学の研究の大に行はれた時で、天慶の二年十一月、天皇様が史記を左中弁藤原在衡を侍読として始めて読まれ、前帝醍醐天皇様は三善清行を御相手に史記を読まれた事などがある。それは兎に角大日本史も山陽同様に此事を記してゐるが、大日本史の筆法は博く采ることはこれ有り、精しく判ずるところとは未だしといふ遣り方である。で、織田鷹洲などは頭から叡山上の談を受取らない。清宮秀堅も受取らない。秀堅は鷹洲のやうに將門に同情してゐる人では無くて、「平賊の事、言ふに足らざる也、彼や鴟梟之性を以て、豕蛇の勢に乗じ、肆然として自から新皇と称し、偽都を建て、偽官を置き、狂妄ほどんど桓玄司馬倫の為に類す、宜なるかな踵を回さずして誅に伏す

るや」と云つて居るほどである。然し下瞰京師のことに就ては、

「将門はもと檢非違使佐たらんことを求めて得ず、憤を懷いて郷

に歸り、遂に禍を首むるのみ、後に興世を得て始めて 僭称す。

猶源頼朝の蛭が島に在りしや、僅に伊豆一国の主たらんことを願

ひしも、大江広元を得るに及びて始めて天下を攘みしが如き也、

正統記大鏡等、蓋し其跡に就いて而して之を拡張せる也、故に採

らず」と云つてゐる。此言は心裏を想ひやつて意を立てゝゐるの

だから、此も亦中ると中らざるとは別であるが、而も正統記等が

其跡に就いて拡張したのであらうといふことは、一箭双鵬を

貫いてゐる。宮本 仲 笏は、扶桑略記に「純友遙に将門謀反之

由をきゝて亦乱逆を企つ」とあるのに照らして見れば、是れ将門

と相約せるにあらざること明らかなりと云つてゐる。純友の南海を乱したのが同時であつたので、如何いかにも将門純友が合謀したことは、たとへば後の石田三成と上杉景勝とが合謀した如くに見え、そこで天子関白の分ちどりといふ談も起つたのであらう。純友は伊予いよのじよう掾で、承平年中に南海道に群盜の起つた時、紀淑人きのよしひとが伊予守で之を追捕した其の事を助けてゐたが、其中に賊の余党を誘つて自分も賊をはじめたのである。将門の事とはおのづから別途に属するので、将門の方は私鬪——即ち常陸ひたちだいじよう大掾国香さきのや前常陸大掾みなもとのももる源護つひ一族と鬪つたことから引つゞいて、終に天慶二年に至つて始めて私鬪から乱賊に變じたのである。其間に将門は一旦上京して上申し、私鬪の罪を赦ゆるされたことがある位である、

それは承平七年の四月七日である。さすれば純友と将門と合謀の事は無い。随したがつて叡山かんきやう 瞰かん京きやうの事も、演劇的には有つた方が精彩があるかも知れないが、事実的には受取りかねるのである。そこで夙つとに覬覦きゆの心を懐いだいてゐたといふことは、面白さうではあるが、正統記に返還して宜よいのである。正統記の作者は皇室尊崇の忠篤の念によつて彼の著述をしたのであるから、将門如きは出来るだけ筆墨の力によつて対治して置きたい余りに、深く事実を考ふるに及ばずして書いたのであらう。山陽外史に至つては多く意を經へないで筆にしたに過ぎない。

将門が檢非違使けびゐしの佐すけたらんことを求めたといふことも、神皇正統記の記事からで、それは当時の武人としては有りさうな望であ

る。然し檢非違使でゞもあれば兎に角、檢非違使の別当は参議以上であるから、無位無官の者が突然にそれを望むべくは無い。して見れば檢非違使の佐か尉じょうかを望んだとして解すべきである。これならば釣合はぬことでは無い。其代りに将門の器量は大に小さくなることであつて、そんなケチな官を望む者が、純友と共に天子関白わけ取りを心がけるとなると、前後が余りに釣合はぬことになる。明末の李自成が落第に憤慨して流賊となつたやうなものであると、秀堅は論じてゐるが、それは少しをかしい。彼国かのの及第は大臣宰相にもなるの径路であるから、落第は非常の失望にもならうが、我邦で檢非違使佐や尉になれたからとて、前途洋として春の如しといふ訳にはならない。随つて摂政忠平が省みなか

つたために檢非違使佐や尉になれ無いとて、謀反むほんをしようとまで
 憤怨する訳もない。此事は、よしやかゝる望を抱いたことが將門
 にあつたとしても、謀反といふことは余りに懸かけはな離れて居て、
 提ちやうちん燈てんと釣鐘、釣合が取れ無き過ぎる。鷹洲は此事を頭から受
 取らないが、鷹洲で無くても、警部長になれなかつたから謀反むほんを
 するに至つたなどといふのは、如何に關東武士の霸氣はき勃はつ々つ
 く々たるにせよ、信じ難いことである。で、正統記に読まれる
 ことは御免を蒙らう。随つて將門始末に読まれることも御免蒙ら
 う。

將門謀反の初発しよほつしん心の因由に關する記事は、皆受取れないが、
 一体当時の世態人情といふものは何様どんなであつたらう。大鏡で概

略は覗へるが、世の中は先づ以て平和で、藤原氏繁盛の時、公卿は榮華に誇つて、武士は漸くやうや実力がありながら官位低く、屈して伸び得ず、藤原氏以外の者はたまたま菅公が暫時榮進された事はあつても遂に左遷を免れないで筑紫つくしに薨こうぜられた。丁度公の薨ぜられた其年に将門は下総に勇ましい産うぶごえ声をあげたのである。抑そもく醍醐帝頃は後世から云へばまことに平和の聖世であるが、また平安朝の形式成就の頂点のやうにも見えるが、然し実際は何に原因するかは知らず随分騒がしい事もあり、嶮さがしい人心の世でもあつたと覚えるのは、史上に盗の多いので気がつく。仏法は盛んであるが、迷信的で、僧侶は貴族側のもので平民側のものでは無かつた。上かみに貴胄きちゆうの私曲が多かつたためでもあらうか、下には武士の

私威を張ることも多かつた。公卿や嬪媛ひんゑんは詩歌管絃の文明にも酔つてゐたらうが、それらの犠牲となつて人民は可なり苦んでゐたらしい。要するに平安朝文明は貴族文明形式文明風流文明で、剛堅確實の立派なものと云はうよりは、繊細優麗のもので、漸

《ぜんく》と次の時代、即ち武士の時代に政権を推移せしむる準備として、月卿雲客が美女才媛等と、美しい衣きぬを纏まとひ美しい詞を使ひ、面白く、貴く、長閑のどかに、優しく、迷信的空的詩歌的音楽的美術的女性的夢幻的享樂的虚榮的に、イソツプ物語の蟋きりぎり蟀すずのやうに、いつまでも草は常緑で世は温暖であると信じて、恋物語や節会せちあひの噂で日を送つてゐる其の一方には、粗あらい衣まを纏まとひ麤あらい詞ことばを使ひ、面白くなく、鄙いやしく、行詰つた、凄すさまじい、これを

絵画にして象徴的に現はせば餓鬼がきの草子の中の生物のやうな、或
 は小説雑話にして空想的に現はせば、酒呑童子しゅてんどうじや鬼同丸きどうまるのや
 うなものもあつたのであらう。醍醐天皇の御代と云へば、古今集
 だの、延喜式だのの出来た時であるが、其御代の昌泰二年には、
 都で放火殺人が多くて、四衛府兵をして夜を警めいまししめられ、其三
 年には上野かうつけに群盜が起り、延喜元年には阪東諸国に盜起り、其
 三年には前安芸守さきのあきのかみ伴忠行は盜の為に殺され、其前後博奕大ばくち
 行はれて、五年には逮捕をせねばならぬやうになり、其冬十月に
 は盜賊が飛驒守ひだのかみの藤原辰忠ときたゞを殺し、六年には鈴鹿山に群盜あ
 り、十五年には上野介かうづけのすけ藤原厚載も盜に殺され、十七年には朝
 に菊宴きくゑんが開かれたが、世には群盜が充ち、十九年には前の武蔵のさき

権介ごんのすけ源任みなもとのたふが府舎を焼き官物を掠かすめ、現任の武蔵守高向
 利春を襲つたりなんどするといふ有様であつた。幸に天皇様の御
 聖徳の深厚なによつて、大なることには至らなかつたが、盗と
 いふのは皆一揆いつぎや騷擾さうぜうの気味合の徒で、たゞの物取りといふの
 とは少し違ふのである。此様な不祥のある度に威を張るのは僧侶
 巫覡ふげきで、扶桑略記ふさうりやくきだの、日本紀略にっぽんきりやくだの、本朝世紀ほんていせいきなどを見れば、
 厭いとはしいほど現世利益を祈る祈祷が繰返されて、何程いと厭いとはしい宗
 教状態であるかと思はせられる。既に将門の乱が起つた時でも、
 浄蔵が大威徳法で将門を誼のろひ、明達が四天王法で将門を調伏し、
 其他神社仏寺で祈立て責立て、とう／＼祈り伏せたといふ事になつてゐる。
 かういふ時代であるから、下では石清水八幡いはしみづはちまんの本

宮の徒と山科やましなの八幡新宮の徒と大喧嘩をしたり、東西兩京で陰陽の具までを刻きざみ絵ゑした男女の神像を供養礼拝して、岐神（さいの神、今の道陸神だうろくじんならん）と云つて騒いだり、下らない事をしてゐる。先祖ぼめ、故郷ぼめの心理で、今までの多くの人は平安朝文明は大層立派なものやうに言いひ做なしてゐる者も多いことであるが、少し料簡れうけんのある者から睨にらんだら、平安朝は少くも政権を、朝廷より幕府へ、公卿より武士へ推移せしむるに適した準備を、氣長に根深く叮嚀に順序的に執行して居たのである。かういふ時代に将門も純友も生長したのである。純友が賊衆追捕に従事して、そして盗魁たうくわいとなつたのも、盗賊になつた方が京官になるよりも、有理であり、真面目な生活であると思つたところより、乱暴

をはじめて、後に従五位下を以て招安されたにもかゝらず、猶ほ伊予、讃岐、周防、土佐、筑前と南海、山陽、西海を狂ひまはつたのかも知れない。純友は部下の藤原恒利といふ頼み切つた奴に裏斬りをされて大敗した後ですら、余勇を鼓して一挙して太宰府を陥れた。苟も太宰府と云へば西海の重鎮であるが、それですら實力はそんなものであつたのである。当時 強くつきやうの男で天下の實勢を洞察するの明のあつた者は、君臣の大義、順逆の至理を気にせぬ限り、何ぞ首を俯ふして生白い公卿の下もとに付かうやと、勝手理屈で暴れさうな情態もあつたのである。

将門は然しながら最初から乱賊叛臣の事を敢あへてせんとしたのではない。身は帝系を出で、猶なほ未いまだ遠からざるものであつた。お

もふに皇を尊び公に殉ずる心の強い邦人の常情として、初めは尋常におとなしく日を送つて居たのだらう。将門の事を考ふるに當つて、先づ一寸其の家系と親族等を調べて見ると、ぎつと是の如くなのである。桓武天皇様の御子に葛原親王と申す一品式部卿の宮がおはした。其の宮の御子に無位の高見王がおはす。高見王の御子高望王が平の姓を賜はつたので、従五位下、常陸大掾、上総介等に任ぜられたと平氏系図に見えてゐる。桓武平氏が阪東に根を張り枝を連ねて大勢力を植つるに至つたことは、此の高望王が上総介や常陸大掾になられたことから起るのである。高望王の御子が、国香、良兼、良将、良の祖である。次に良持は下総介、従五位下、長田の祖である。次に良茂は常陸少掾

である。

扱さて将門は良将の子であるが、長子かといふに然さう様では無い。大日本史は系図に扱よつたと見えて第三子としてゐるが、第二子としてゐる人もある。長子将持、次子将弘、第三子将門、第四子将平、第五子将文、第六子将武、第七子将為と系図には見えるが、将門の兄将弘は將軍太郎と称したとある。将持の事は何も分らない。将弘が將軍太郎といひ、将門が相馬小次郎といひ、系図には見えぬが、千葉系図には将門の弟に御みくりや廚三郎将頼といふがあつて、其次が大葦原四郎といった事を考へると、将門は次男かとも思はれる。よし三男であつたにしろ、将持といふものは蚤はやく消えてしまつて、次男の如き實際状態に於て生長したに相違無い。イヤそ

れどころでは無い、太郎将弘が早世したから、将門は實際良将の相続人として生長したのである。将門の母は犬養春枝むすめの女である。此の犬養春枝は蓋しけだ万葉集に名の見えてゐる犬養浄きよひと人の裔すゑであらう。浄人は奈良朝に当つて、下総しもふさ少せう目を勤めた人であつて、浄人以来下総の相馬に居たのである。此相馬郡寺田村相馬総代八幡の地方一帯は多分犬養氏の蟠ばん掘きよしてゐたところで、将門が相馬小次郎と称したのは其の因縁いんねんに疑無い。寺田は取手駅と守谷との間で、守谷の飛地といふことであり、守谷が将門抛有の地であつたことは人の知るところである。将門は斯様かういふ大家族の中に生れて来て、沢山の伯父や叔父を有ち、又伯父国香の子には貞盛、繁盛、兼任、伯父良兼の子には公雅、公連、公元、

叔父良広の子には経邦、叔父良文の子には忠輔、宗平、忠頼、叔父良持の子には致持^{むねもち}、叔父良茂の子には良正、此等の沢山の従兄弟^{とこ}を有した訳である。

此の中で生長した将門は不幸にして父の良将を亡^{うしな}つた。将門が何歳の時であつたか不明だが、弟達の多いところを見ると、蓋^{けだ}し十何歳であつたらしい。幼子のみ残つて、主人の亡くなつた家ほど難儀なものはない。母の里の犬養老人でも丈夫ならば、差詰め世話をやくところだが、それは存亡不明であるが、多分既に物故してゐたらしい年頃である。そこで一族の長として伯父の国香が世話をするか、次の伯父の良兼が将門等の家の事をきりもりしたこととは自然の成行であつたらう。後に至つて将門が国香や良兼と

仲好くないやうになつた原因は、蓋し此時の国香良兼等が伯父さん風を吹かせ過ぎたことや、将門等の幼少なのに乗じて私わたくしをしたことに本づくと思像しても余り間違ふまい。さて将門が漸やうやく加冠するやうになつてから京上りをして、太政大臣藤原忠平に仕へた。これは将門自分の意に出たか、それとも伯父等の指揮に出たか不明であるが、何にせよ遙と下総てづるから都へ出て、都の手振りを学び、文武の道を修め、出世の手蔓てづるを得ようとしたことは明らかである。勿論将門のみでは無い、此頃の地方の名族の若者等は因縁によつて都の貴族に身を寄せ、そして世間をも見、要路の人ににぎりやうこつがら技倆骨柄を認めて貰ひ、自然と任官叙位の下地にした事は通例であつたと見える。現に国香の子の常平太貞盛もまた都上りを

して、何人の奏薦によつたか、微官ではあるが左馬允さまのすけとなつてゐたのである。今日で云へば田舎の豪家の若者が従兄弟いとこ同士二人、共に大学に遊んで、卒業後東京の有力者間に交際を求め、出世の緒を得ようとしてゐるやうなものである。此処で考へらるゝことは、将門も鎮守府將軍の子であるから、まさかに後の世の曾我の兄弟のやうに貧窮して居たのではあるまいが、一方は親無しの、伯父の氣息いきのかゝつてゐるために世に立つてゐる者であり、一方は一族の長者常陸大掾国香の総領として、常平太とさへ名乗つて、仕送りも豊かに受けてゐたものである貞盛の方が光つて居たらうといふことは、誰にも想像されることである。ところが異をかしいこともあればあるもので、将門の方で貞盛を悪く思ふとか悪く噂うはさす

るとかならば、ばうしつさいき嫉猜忌の念、俗にいふ「やつかみ」で自然に然さう様いふ事も有りさうに思へるが、別に将門が貞盛を何どう様の斯かう様のしたといふことは無くて、却かへつて貞盛の方で将門を悪く言つたことの有るといふ事実である。

勿論事実といつたところで古事談に出て居るに過ぎない。古事談はあきかね顯兼の撰で、余り確實のものとも為しかねるが、大日本史も貞盛伝に之を引いてゐる。それは斯かう様である。将門の在京中に、貞盛が嘗かつて式部卿敦あつぎね実親王のところいたに詣つた。丁度其時に将門もまた親王の御おんもと許しんこうへ伺候して帰るところで、従兄弟同士はハタと御門で行逢ふた。彼方かなたがジロリと見れば、此方こちらもギロリと見て過ぎたのであらう。貞盛は親王様に御目にかゝつて、残念なるこ

とには今日郎等無くして将門を殺し得ざりし、郎等ありせば今日殺してまし、彼奴は天下に大事を引出すべき者なり、と申したといふ事である。これは甚だ不思議なことで、貞盛が呂公や許子の術を得て居たか何様かは知らないが、人相見でも無くて思ひ切つたことを貴人の前で言つたものである。此時は将門純友叡山で相談した後であるとも云は無ければ理屈の立たぬことで、将門はまだ国へも帰らず刀も抜かず、謀反どころか喧嘩さへ始めぬ時である。それを突然に、郎等だにあらば打殺してましものと言ふのは、余りに従兄弟同士として貴人の前に口外するには太甚はなはだしいことである。親王様に貞盛がこれだけの事を申したとすれば、もう此時貞盛と将門とは心中に刃を研とぎあつてゐたとしなければ

ならぬ。未だ父の国香が殺された訳でも無し、将門が何を企て、居たにせよ、貞盛が牒ていふじや者をして知つてゐるといふ訳も無いのに、たゞ悪い者でござる、御近づけなさらぬが宜しいとでも云ふのならば、後世の由井正雪熊沢蕃山出会の談のやうな事で、まだしも聞えてゐるが、打殺さぬが口惜しいとまで申したとは余り奇怪である。然すれば貞盛の家と将門とが、もう此時は火をすつた中であつて、貞盛が其事を知つてゐたために、行く／＼は無事で済むまいとの予想から、そんな事を云つたものだと思像して始めて解釈のつく事である。こゝへ眼を着けて見ると、古事談の記事が事実であつたとすると、国香が将門に殺されぬ前に、国香の忤せがれは将門を殺さうとしてゐたといふ事を認め、そして殺さぬを残念と思

つたほどの葛藤かつとうが既に存在して居たと睨まねばならぬことなるのである。戯曲的の筋は夙はやく此の辺から始まつてゐるのである。

将門は京に居て龍口の衛士になつたか知らぬが、系図に龍口の小次郎とも記してあるに拠よれば、其のくらゐなものにはなつたのかも知れぬ。が、其の詮議は擱おいて、将門と貞盛の家とは、中なかむ

睦つまじく無くなつたには相違無い。それは今昔物語に見えてゐる如くに、将門の父の良将の遺産を将門が成長しても国香等が返さなかつたことで、此の様な事情は古も今もやゝもすれば起り易いことで、曾我の殺傷も此から起つてゐる。今昔物語が信じ難い書であることは無論だが、此の事實は有勝の事で、大日本史も将門始末も皆採つてゐる。将門在京中に既に此事があつて、貞盛と将

門とは心中互におもしろく無く思つてゐたところから、貞盛の言も出たとすれば合点が出来るのである。

今一つは将門と源護一族との間の事である。これは其原因が不明ではあるが、因縁いんねんのもつれであるだけは明白である。護は常陸さきの前の大掾だいしようで、そのまゝ常陸の東石田に居たのである。東石田は筑波つくばの西に当るところで、国香もこれに居たのである。護は世系が明らかでないが、其の子の扶たすく、隆、繁と共に皆一字名であるところを見ると、嵯峨さが源氏でもあるらしく思はれる。何にせよ護も名家であつて、護の女を将門の伯父上総介良兼は妻にしてゐる。国香も亦其一人を嫁にして貞盛の妻にしてゐる。常陸六郎良正もまた其一人を妻にしてゐる。此の良正は系図では良茂の

子になつてゐるが、おそらくは誤りで、国香の同胞で一番季すゑなのであらう。

将門と護とは別に相敵視するに至る訳は無い筈であるが、此の護の一族と将門と私闘を起したのが最初で、将門の伯叔父の多いにかゝはらず、護の家と縁組をしてゐる国香の家、良兼の家、良正の家が特に将門を悪にくんで之を攻撃してゐるところを見ると、何でも源護の家を中心とし、之に關聯して紛糾ふんきうした事情が有つての大火事と考へられる。将門始末では、将門が護の女むすめを得て妻としようとしたが護が与へなかつたので、将門が怒つたのが原因だと云つて居る。して見れば将門は恋の叶かなはぬ焦燥せうさうから、車を横に推出したことになる。さすれば良正か貞盛か二人の中の一人が、

将門の望んだ女を得て妻としてしまつた為に起つた事のやうに思はれるが、如何いかに将門が乱暴者でも、人の妻になつてしまつた者を何としようといふこともあるまい。又それが遺恨の本になるといふことも、成程野暮な人の間に有り得るにしても、皆が一致して手甚てひどく将門を包围攻撃するに至るのは、何だか逆なやうである。思ふ女をば奪はれ、そして其女の縁つらなに連る一族総体から、此の失恋漢、死んでしまへと攻立てられたといふのは、何と無く奇異な事態に思へる。又たとへ将門の方から手出しをしたにせよ、恋の叶はぬ忌しきから、其女の家をはじめ、其姉妹の夫たちの家まで、撫斬なでぎりにしようといふのも何となく奇異に過ぎ酷毒に過ぎる。何にせよ決してたゞ一ひとすぢ条の事ではあるまい、可なり錯綜さくそうした

事情が無ければならぬ。貞盛が将門を殺したがつた事も、恋の叶かなつた者の方が恋の叶はぬ者を生かして置いては寢覚が悪いために打殺すといふのでは、何様どうも情理が桂馬筋けいますぢに働いて居るやうである。

故蹟考ではかう考へてゐる。将門が迎へた妻は、源護の子の扶隆、繁の中で、懸想けさうして之を得んとしたものであつた。然るに其の婦人は源家へ嫁すことをせずして相馬小次郎将門の妻となつた。そこでぼうしつ嫉あはの念禁じ難く、兄弟姉妹の縁に連なる良兼貞盛良正等の力を併せて将門を殺さうとし、一面国香良正等は之を好機とし、将門を滅して相馬の夥おびただしい田産を押収せんとしたのである。と云つて居る。成程源家の子のために大勢が骨折つて貰ひ得て呉

れようとしたり美人を貰ひ得損じて、面目を失はせられ、しかも日ひ比ごろから彼が居らなくばと願つて居た将門に其の婦人を得られたとしては、要撃して恨うらみを散じ利を得んとするといふことも出て来さうなことである。然しこれも確拠があつてでは無い想像らしい。たゞ其中の将門を滅せば田産押収の利のあるといふことは、拠よるところの無い想像では無い。

要するに委みきよく曲の事は徴知することが出来ない。耳目の及ぶところ之を知るに足らないから、安倍晴明なら識神を使つて委細を悟るのであるが、今何とも明解することは我等には不能だ。天慶年間、即ち将門死してから何程の間も無い頃に出来たといふ将門記の完本が有つたら訳も分かるのであらうが、今存するものは残ざ

闕んけつであつて、生憎発端のところが無いのだから如何いかんとも致方は無い。然し試みに考へて見ると、将門が源家の女むすめを得んとしたことから事が起つたのでは無いらしい、即ち将門始末の説は受取り兼ねるのであつて、むしろ将門の得た妻の事から私闘は起つたらしい。何故なぜといへば将門記の中の、将門が勝を得て良兼を困んだところの条くだりの文に、「斯かくの如く将門思惟す、凡およそ当夜の敵にあらずといへども（良兼は）脈たづを尋ぬるに疎うとからず、氏を建つる骨肉なり、云はゆる夫婦は親しけれども而も瓦に等しく、親戚は疎くしても而も葦たとに喩ふ、若し終に（伯父を）殺害を致さば、物の譏そしり遠をち近こちに在らんか」とあつて、取籠めた伯父良兼を助けて逃れしめてやるところがある。その文氣を考へると、妻の故の事を

以て伯父を殺すに至るは愚なことであるといふのであるから、将門が妻となし得なかつた者から事が起つたのでは無くて、将門が妻となし得たものがあつてそれから伯父と弓きゆうせん 箭せんをとつて相あいま見みゆるやうにもなつたのであるらしい。それから又同記に抛ると、将門を告訴したものは源護である。記に「然る間前まきの大だい掾う、源護の告状に依りて、件くだんの護並びに犯人平将門及び真樹まき等召進まきずべきの由の官符、去る承平五年十二月二十九日符、同六年九月七日到来」とあるから、原告となつた者は護である。真樹は佗わ田びた真樹で、国香の属僚中の錚びた 《さうさう》たるものである。これに依つて考へれば、良正良兼は記の本文記事の通り、源家が敗戦したによつて婦の縁に引かれて戦を開いたのだが、最初はたゞ

源護一家と将門との間に事は起つたのである。して見れば将門が妻としたものに關聯して源護及び其子等と将門とは鬪ひはじめたのである。

戯曲はこゝに何程でも書き出される。かつて同じ千葉県下に起つた事実で斯^かういふのがあつた。将門ほど強い男でも何でも無いが、可なりの田^{でん}邑^{いふ}を有してゐる片孤^{へんこ}があつた。其の児の未^{いま}だ成長せぬ間、親戚の或る者は其の田邑を自由にして居たが、其の児の成人したに至つて当然之を返附しなければならなくなつた。ところで其の親戚は自分の娘を其の男に娶^{めと}らせて、自己は親として其の家に臨む可く計画した。娘は醜くも無く愚でもなかつたが、男は自己が拘束されるやうになることを厭ふ余りに其の娘を強く

嫌つて、其の婚儀を勧めた一族達と烈しく衝突してしまつた。悲劇はそこから生じて男は放蕩者はうたうものとなり、家は乱脈となり、紛争は転輾てんてん増大して、終に可なりの旧家が村にも落着いて居られぬやうになつた。これを知つてゐる自分の眼からは、一いつしやく齟の曲が観えてならない。真に夢の如き想像ではあるが、国香と護とは同国の大掾であつて、二重にも三重にも縁合となつて居り、居処も同じ地で、極めて親しかつたに違ひ無い。若し将門が護むすめの女を欲したならば、国香は出来かぬ縁をも纏まとめようとしたことであらう。其の方が将門を我が意の下に置くに便宜ではないか。して見れば将門始末の記するが如きことは先づ起りさうもない。もし反対に、護の女を国香が口をきいて将門に娶めとらせようとして、

そして将門が強く之を拒否した場合には、国香は源家に対しても、
 自己の企に於ても償つぐなひ難き失敗をした訳になつて、貞盛や良兼や
 良正と共に非常な嫌な思ひをしたことであらうし、護や其子等は
 不面目を得て憤恨したであらう。将門の妻は如何なる人の女であ
 ったか知らぬが、千葉系図や相馬系図を見れば、将門の子は良よしな
 兌ほ、将国、景遠、千世丸等があり、又十二人の実子があつたな
 どと云ふ事も見えるから、桔梗ききやうの前の物語こそは、薬品の桔梗
 の上品が相馬から出たに本づく戯曲家の作意ではあらうが、妻さいせ
 妾う共に存したことは言ふまでも無い。で、将門が源家の女を蔑べ
 視つしして顧みず、他より妻を迎へたとすると、面目を重んずる此時
 代の事として、国香も護の子等も、殊に源家の者は黙つて居られ

ないことになる。そこで談判論争の末は双方後へ退らぬことになり、武士の意気地上、護の子の扶、隆、繁の三人は将門を敵に取つて闘ふに至つたらうと想像しても非常な無理はあるまい。

たたかひ

闘は何にせよ将門が京より帰つて後数年にして発したので、其の場所は下総の結城郡と常陸の真壁郡の接壤地方であり、時は承平五年の二月である。どちらから戦いくさをしかけたのだから明記はないが、源の扶、隆等が住地で起つたのでも無く、将門の田園所在地から起つたのでも無い。将門の方から攻掛けたやうに、歴史が書いてゐるのは確實で無い。将門と源氏等と、どちらが其の本領まで戦場から近いかと云へば、将門の方が近いからである。相馬から出たなら遠いが、本郷や鎌庭からなら近いところから考へる

と、将門が結城あたりへ行かうとして出た途中を要撃したのもらしい。左も無くては釣合が取れない。若し将門が攻めて行つたのを禦ふせいだものとしては、子飼川を涉わたつたり鬼怒川を渡わたつたりして居て、地理上合点が行かぬ。将門記に其の鬪の時の記事中見ゆる地名は、野本、大串、取木等で、皆常陸の下妻附近であるが、野本は下総の野爪、大串は真壁の大越、取木は取とり不ふ原ばらの誤か、或は本木村といふのである。攻防いづれがいづれか不明だが、記には「爰こゝに将門罷やまんと欲すれども能はず、進まんと擬するに由無し、然して身を励まして勸すすめし、刃を交へて合戦す」とあるに照らすと、何様も扶等が陣を張つて通路を截きつて戦を挑いんだのである。此の鬪は将門の勝利に帰し、扶等三人は打死した。将門は勝

に乗じて猛烈に敵地を焼き立て、石田に及んだ。国香は既に老衰して居た事だらう、何故なげといへば、国香の弟の弟の第二子若くは第三子の将門が既に三十三歳なのであるから。国香は戦死したか、又焼立てられて自殺したか、後の書の記載は不詳である。双方の是非曲直は原因すら不明であるから今評論が出来ぬが、何にせよ源護の方でも鬱懷や已む能あたはずして是こゝに至つたのであらうし、将門の方でも刀を抜いて見れば修羅心熾盛しせいになつて、遣りつけるだけは遣りつけたのだらう。然しこゝに注意しなければならぬのは、是はたゞ私闘であつて、謀反むほんをして国の治者たる大掾を殺したのではない事である。

貞盛は国香の子として京に在つて此事を聞いて暇いとまを請こうて帰郷

した。記に此場合の貞盛の心を書いて、「貞盛倩つらく 案内を検するに、およそ将門は本意の敵にあらず、これ源氏の縁坐也云。嬪母さうぼは堂に在り、子にあらずば誰か養はん、田地は数あり、我にあらずば誰か領せん、将門に睦むつびて云、乃ち対面すなはせんと擬す」とある。国香死亡記事の本文は分らないが、此の文気を観ると、将門が国香を心底から殺さうとしたので無いことは、貞盛が自認してゐるので、源氏の縁坐かやうで斯様の事も出来たのであるから、無む暗やみに将門を悪にくむべくも無い、一族の事であるから寧ろ和睦わぼくしよう、といふのである。前に云つた通り将門は自分を攻めに來た良兼を取囲んだ時もわざと逃がした人である、国香を強ひて殺さう訳は無い。貞盛の此の言を考へると、全く源氏と戦つたので、余波が

国香に及んだのであらう。伯父殺しを心掛けて将門が攻寄せたものならば、貞盛に斯かういふ詞の出せる訳も無い。但し国香としては田でんいふ邑いふの事につきて将門に対して心弱いこともあつた歟か、さらずも居館を焼亡されて撃退することも得せぬ恥辱に堪へかねて死んだのであらうか。こゝにも戯曲的光景がいろ／＼に描き出さるゝ余地がある。まして国香の郎党佗田真樹は弱い者では無い、後に至つて戦死して居る程の者であるから、将門の兵が競ひかゝつて国香を攻めたのならば、何等かの事蹟を生ずべき訳である。

良正は高望王の庶子で、妻は護むすめの女であつた。護は老いて三子を尽く失つたのだから悲嘆に暮れたことは推測される。そこで父こと／＼の歎なげき、弟うらみの恨、良正の妻は夫に対して報復の一合戦をすゝめたの

も無理は無い。云はれて見れば後へは退けぬので、良正は軍兵を動かして水守みづもりから出立した。水守は筑波山つくばさんの南の北条の西である。兵は進んで下総堺の小貝川の川曲に來た。川曲は「かはわた」と訓よんだのであらう、今の川又村の地で当時は川の東岸であつたらしい。一水を渡れば豊田郡で将門領である。貞盛が此時加担して居なかつたのであるのは注意すべきだ。将門の方でも、其義ならば伯父とは云へ一塩つけてやれと云ふので出動した。時は其年の十月廿一日であつた。将門の軍は勝を得て、良正は散に打うちなされて退いた。此も私闘である。将門はまだ謀反はして居らぬ、勝つて本郷へ歸つた。

「負け碁ごは兎角あとをひく也」で、良正は独力の及ぶ可からざる

を以て下総介良兼（或はいふ上総介）に助勢を頼んで将門に憂き目を見せようとした。良兼は護の縁につながつて居る者の中の長者であつた。良兼の妻も内から牝めんどり鶏のすゝめを試みた。雄鶏は終つひに関ときの声をつくつた。同六年六月二十六日、十二分に準備したる良兼は上総下総の兵を発して、上総の地で下総へ斗と入してゐる武射郡むさの径路から下総の香取郡の神崎かうさきへ押出した。神崎は滑川より下、佐原より上の利根川沿岸の地だ。それより大河を渡つて常陸の信太郡の江前の津へかゝつた。江前はえのさきで、今の江戸崎である。それから翌日、良正がゐる筑波の南の水守へ到着したといふ事だ。私闘は段と大きくなつた。関を打破つて通りこそせざれ、問道を通つて、苟いやしくも何の介すけといふ者が、官司の禁き

んあつ
遏を省みず武力で争はうといふのである。良正は喜んで迎へた。貞盛も参会した。良兼は貞盛むかに対つて、常平太何事ぞ我等と与にせざるや、財物を掠かすめられ、家倉を焼かれ、親類を害せられて、穩便を旨むねとするは何ぞや、早 合力して将門を討ち候へと、叔父様さんかほ 顔の道理らしく説いた。言はれて見れば其の通りであるから、貞盛も吾が女房の兄弟の仇、言はず語らずの父の讐かたきであるから、心得た、と言切つた。姉妹三人の夫たる叔父甥三人は、良兼を大将にして下野しもつけを指して出発した。下野から南に下つて小次郎めを圧迫しようといふのだ。将門はこれを聞いて、御座んなれ二本棒ども、とでも思つたらう。財布の大きいものが、博奕はきつと勝つと定まつては居ないのだ。何程の事かあらん、一当てあて、

やれと、此方こちらからも下野境まで兵を出したが、如何さま敵は大軍
 で、地も動き草も靡なびくばかりの勢堂と攻めて来た。良兼の軍は
 馬も肥え人も勇み、鎧よろひの毛もあざやかに、旗指物もいさぎよく、
 弓矢、刀薙なぎなた刀、いづれ美しく、搔かいだて楯ひしくと垣の如く築つ
 き立て、勢ひ猛さかに壮んに見えた。將門の軍は二度の戦に甲冑かっちゆう
 も摺すれ、兵具ひやうぐも十二分ならず、人数も薄く寒げに見えた。譬たとへ
 ば敵の毛羽艶やかに峨冠がくわん紅そびに聳そびえたる鶏の如く、此方こなたは見苦し
 き羽抜鳥の肩そぼろに胸露あらはに貧しげなるが如くであつたが、戦
 つて見ると羽ふくよかなる地鶏は生命知らずの軍鶏しやもの敵では無か
 った。將門の手下の勇士等は忽たちまちに風の木の葉と敵を打払うつた。
 良兼の勢は先を争つて逃げる、將門は鞭を揚げ名よばを呼はつて勢に

乗つてとつかん 喊し駆け崩した。敵はきたなくも下野の府に閉塞されてしまつた。こゝで将門が刻毒に攻立てたら、或は良兼等をひど酷いめにあはせ得たかも知らぬが、将門の性質の美のうかゞひ窺知らるゝころはここにあつて、妻の故を以て伯父を殺したと云はるゝを欲せぬために一方をゆるして其の逃ぐるにまか任せた。良兼等は危い生命を助かつて、から辛くものが遁れ去つてしまつた。そこで将門は明かな勝利を得て、府の日記へ、下総介が無道に押寄せて合戦しかけた事と、これを追退けてしまつたことをば明白に記録して置いて、悠然と自領へ引取つた。火事は大分燃広がつた、私闘は余国までの騒ぎになつたが、しかもまだ私闘である、むほん謀反をしたのでは無かつた。これだけの大事になつたのであるから、四方隣国も皆手出

しこそせざれ、目を側そばだて、注意したに相違ない。将門が国庁の記録に事実をとゞめ、四方に實際を知らしめたのは、為し得て男らしく立派に智慮もあり威勢もあることであつた。

源護の方は事を起した最初より一度も好い目を見無かつた。痴ち者が衣服しやの焼け穴をいぢるやうに、猿が疵きず口くちを気にするやうに、段と悪いところを大きくして、散な事になつたが、いやに賢く狡かうくわつ滑なものは、自分の生命を抛出なげだして闘ふといふことをせずに、いつも他の勢力や威力や道理らしいことやを味方にして敵くるしを窘めることに長たけたものだ。何様どういふ告訴状たてまつを上つたか知らぬが、多分自分が前の常陸大掾であつたことと、現常陸大掾であつた国香の死したことを利用して、将門が暴威に募り乱逆あへを敢てし

たことを申立てたに相違無く、そしてそれから後世の史をして将門常陸大掾国香を殺すと書かしめるに至らせたのであらう。去年十二月二十九日の符が、今年九月になつて、左近衛番長の正六位上英保あぼのすみゆき純行、英保氏立、宇自加支興もちおき等によつて齎もたらされ、下毛下総常陸等の諸国に朝命が示され、原告源護、被告将門、および国香の麾下きかの佗田真樹を召寄せらるゝ事になつた、そこで将門は其年十月十七日、急に上京して公庭に立つた。一部始終を申立てた。阪東訛ばんどうなまりの雑ばんおんつた蛮音で、三戦連勝の勢に乗じ、がんぐと遣付やりつけたことであらう。もとより事実を陰蔽して白粉を傅つけた談をするが如きことは敢あへてし無かつたらう。箭やが来たから箭を酬むくいた、刀が加へられたから刀を加へた、弓箭ゆみや取る身の是非に

及ばず合戦仕つて幸さいはひに斬り勝ち申したでござる、と言つたに過ぎまい。勿論私わたくしに兵へいぢやう仗ちやうを動かした責罰けんくわい譴けんくわい誨かいは受けたに相違あるまいが、事情が分明して見れば、重罪に問ふには足たら無いことが認められたのに、かてゝ加へて皇室御慶事があつたので、何等罪せらるゝに至らず、承平七年四月七日一件落着して恩詔を拝した。檢非違使けびゐしちやう庁ちやうの推問あに遇うて、そして将門の男らしいことや、勇威を振つたことは、却かへつて都の評判となつて同情を得たことと見える。然し干かんくわ戈くわを動かしたことは、深く公より譴けんせき責せきされたに疑無い。で、同年五月十一日に京を辞して下総に歸つた。

とは記に載つてゐるところだが、これは疑はしい。こゝに事実の前後錯誤と年月の間違があるらしい。将門は幾度も符を以て召

喚されたが、最初一度は上洛し、後は上洛せず、英保純行に委あづか曲きよくを告げたのである。将門はそれで宜よいが、良兼等は其その儘まゝ指さを啣くはへて終ふ訳には、これも阪東武者の腹の虫が承知しない。甥おひの小僧つ子に塩をつけられて、国香亡き後は一族の長者たる良兼ともある者が屈してしまふことは出来ない。護も貞盛も女達も瞋し恚いの火を燃もやさない訳は無い。将門が都から帰つて来て流石さすがに謹慎して居る状さまを見るに及んで、怨を晴らし恥辱を雪そぐは此時と、良兼等は亦また復く押寄せた。其年八月六日に下総境の例の小貝川の渡に良兼の軍は来た。今度は良兼もをかきな智慧ちゑを出して、将門の父良将祖父高望王の像を陣頭に持出して、さあ箭やが放せるなら放して見よ、鉾ほこさき先が向けらるゝなら向けて見よと、取つて蒐かつた。

籠城でもした末に百計尽き力乏しくなつてならばいざ知らず、随分いやな事をしたものだが、如何いかに将門勇猛なりとも此には閉口した。「親の位牌みはいで頭こつつり」といふ演劇には、大概な暴れ者も恐れ入る格で、根が無茶苦茶な男では無い将門は神妙におとなしくして居た。おとなしくした方が何程腹の中は強いかわれないのだが、差当つて手が出せぬのを見ると、良兼の方は勝誇つた。豊田郡の栗栖院くるすゐん、常羽御いくはのみうまや厩うまやや将門領地の民家などを焼払つて、其翌日さつと引揚げた。

芝居で云へば性根場しやうねばといふところになつた。将門は一塩つけられて怒気胸みに充ち塞ふさがつたが、如何とも為せん方かたは無かつた。で、其月十七日になつて兵を集めて、大方郷おほかたがう堀越ほりこしの渡に陣を構へ、

敵を禦ふせがうとした。大方郷は豊田郡大房村の地で、堀越は今水路
 が變つて渡頭ととうでは無いが堀籠村といふところである。併しかし將門は
 前度とは異つて、手痛くは働か無かつた。記には、脚氣を病んで
 居て、毎事もつもう朦もつもうとしてゐたといふが、そればかりが原因か、或
 は都での訓諭に恐懼きようくして、仮りにも尊族に対して私わたくしに兵具を動
 かすことは悪いと思つた、しほらしい勇士の一面の優美の感情か
 ら、咩うんと忍耐したのかも知れない。弱くない者には却かへつて此かう様い
 ふ調子はあるものである。で、はか／＼しい抵抗も何等あへ敢てし
 なかつたから、良兼の軍は思ふが儘に乱暴した。前の恨を霽はらす
 は此時と、郡中を攻こうりやく掠やくし焚ふんせう焼して、随分ひど甚い損害を与へた。
 將門は猿島郡ぐんの葦津江、今の蘆谷といふところに蟄ちつぷく伏したが、

猶危険が身に逼せまるので、妻子を船に乗せて広河ひろかはの江に泛うかべ、おのれは要害のよい陸閉といふところに籠つた。広河の江といふのは飯沼いひぬまの事で、飯沼は今はは甚はなしく小さくなつてゐるが、それは徳川氏の時になつて、伊達だて弥惣兵衛やそうべゑ為永ためながといふものが、享保年間に飯沼の水が利根川より高いこと一丈九尺、鬼怒川より高いことと横根口で六尺九寸、内守谷川たくぐち辰口たつぐちで一丈といふことを知つて、大工事を起して、水を落し、数千町歩の新田を造つたからである。陸閉といふ地は不明だが、蓋けだし降間ふるまの誤写で、後の岡田郡降間木ふるまぎ村の地だらうといふことである。降間木ももと降間木沼とかいふ沼があつたところである。さあ物語は一大関節にさしかゝつた。将門が斯様におとなしくして居て、むしろ敵を避け身を屈して居

るやうになつたところで、良兼方の一分は立つたのだから、其儘に良兼方が凱歌を奏して退ひいて終しまつたれば、或は和解の助言なども他から入つて、宜い程のところをりあに双方折合ふといふことも成立つたか知れないのである。ところが転石の山より下くだるや其の勢いきほひ必つひず加はる道理で、終つひに良兼将門は両立す可からざる運命に到着した。それは将門が安穩を得させようとして跡を埋め身を隠させた。其の愛妻を敵が発見したことであつた。どうも良兼方の憎悪は此の妻にかゝつて居たらしい。それ占しめたといふのであつたらう、忽ちてむかに手対うちころふ者を討う殺し、七八艘さうの船に積載した財貨三千余端を掠奪し、かよわい妻子を無むざん漸きりころにも斬殺してしまつたのが、同月十九日の事であつた。元来火薬が無かつた訳では無いから、如

何に一旦は神妙にしてゐても、此処に至つて爆発せずには居ない。後の世の頼朝が伊豆に潜ひそんで居た時も、たゞおとなしく世を終つたかも知れないが、伊東入道に意中の女は引離され兒は松川に投入れるゝに及んで、ぶるゝと其の巨おほきい頭を振つて牙きばを咬かんで怒り、せめては伊豆一国の主になつて此恨を晴らさうと奮ひ立つたとある。人間以上に心を置けば、恩愛に惹ひかれて動転するのは弱くも浅くも甲斐かひ無くもあるが、人間としては恩愛の情の已やみ難がたいのは無理も無いことである。如何いかに相馬小次郎が勇士でも心臓が筑波御影つくばみかげで出来てゐる訳でもあるまいから、落さうと思つた妻子を殺されては、涙をこぼして口惜くやしがり、拳を握りつめて怒つたことであらう。これはまた暴れ出さずには居られない訳だ。し

かしまだ私闘である、私闘の心が刻毒になつて来たのみである、謀反むほんをしようとは思つて居ないのである。

記の此処こゝの文が妙に拗ねぢれて居るので、清宮秀堅は、将門の妻は殺されたのでは無くて上総かづさに拘とらはれたので、九月十日になつて弟の謀はかりごとによつて逃歸つたといふ事に読んである。然し文に「妻子同共討取」とあるから、何様どうも妻子は殺されたらしく、逃にげ還かへつたのは一緒に居いた妾であるらしい。が、「爰将門妻去夫留、忿怨不少」 「件妻背同気之中、逃歸於夫家」とあるところを見ると、妻が拘はれたやうでもある。「妾恒存真婦之心」「妾之舎弟等成謀」とあるところを見ると、妾のやうでもある。妻妾二字、形相近いから何共まぎ紛まぎらはしいが、妻子同共討取の六字があるので、妻子は

殺されたものと読んで居る人もある。どちらにしても強くは言張り難いが、「然而将門尚与伯父為宿世之讐」といふ句によつて、何にせよ此事が深い怨恨ゑんこんになつた事と見て差支さしつかへは無ない。しばらく妻子は殺されて、拘とらはれた妾は逃歸つた事と見て置く。

此事あつてより将門は遺恨ゑんこん已やみ難がたくなつたであらう、今までは何時いつも敵に寄せられてから戦つたのであるが、今度は我から軍を率ひきゐて、良兼が常陸ひたちの真壁郡の服織はつとり、即ち今の筑波山の羽鳥に居たのを攻め立つた。良兼は筑波山に拠よつたから羽鳥を焼払ひ、戦書を贈おくつて是非の一戦を遂とげようとしたが、良兼は陣を堅くして戦は無かつたので、将門は復讐的に散々《さん／＼》敵地を荒して歸つた。斯か様なれば互たがひに怨恨ゑんこんは重かさなるのみであるが、良

兼の方は何様どうしても官職を帯びて居るので、官符は下くだつて、将門を追捕すべき事になつた。良兼、護、今は父の後を襲ひたふた常陸ひたちの大掾貞盛、良兼の子の公雅、公連、それから秦清文、此等が皆職を帯びて、武蔵、安房あは、上総、下総、常陸、下野諸国の武士を驅かりもよほ催ほして将門を取つて押へようとする。将門は将門で後へは引け無くなつたから勢威を張り味方を募つつて對抗する。諸国の介すけや守かみや掾じようやは、騒乱を鎮める為に戮りくりよく力ちからせねばならぬのであるが、元來が私闘で、其の情実を考へれば、強あなち将門を片手落あなに對治すべき理があるやうにも思へぬから、官符があつても誰も好んで矢の飛び劍の舞ふ中へ出て来て危い目に逢はうとはしない。将門は一人で、官職といへば別に大したものものを有してゐるのでも

無い、たゞ伊勢太神宮の御屯倉を預かつて相馬御厨の司であるに過ぎぬのであるに、父の余威を仮るとは言へ、多勢の敵に対抗して居られるといふものは、勇悍である故のみでは無い、蓋し人の同情を得てゐたからであつたらう。然無くば四方から圧逼せられずには済まぬ訳である。

良兼は何様かして勝を得ようとしても、尋常の勝負では勝を取る事が難かつた。そこで便宜を伺ひ巧計を以て事を済さうと考へた。怠り無く偵察してゐると、丁度将門の雑人に支部子春丸といふものがあつて、常陸の石田の民家に恋中の女をもつて居るので、時其許へ通ふことを聞出した。そこで子春丸をつかまへて、絹を与へたり賞与を約束したりして、将門の営

の勝手を案内させることにした。将門は此頃石井に居た。石井は
 「いはる」と読むので、今の岩井が即ちそれだ。子春丸は恋と慾
 とに心を取られ、良兼の意に従つて、主人の營所の勝手を悉く良
 兼の士に教へた。良兼はほくそ笑んで、手腕のある者八十余騎を
 扨んで、ひそくと不意打をかける支度をさせた。十二月の十四
 日の夕に良兼の手の者は発して、首尾よく敵地に突入し、風の如
 くに進んで石井の營に斫入つた。将門の士は十人にも足らなかつ
 たが、敵が襲ふのを注進した者があつて、急に起つて防ぎ戦つた。
 将門も奮闘した。良兼の上兵多治良利は一挙に敵を屠らんと
 努力したが、運拙く射殺されたので、寄手は却つて散になつて、
 命を落す者四十余人、可なり手痛き戦はしたが、敵地に踏込むほ

どの強い武者共が随分巧みに、うま／＼近づいたにもかゝらず、此の突騎襲撃も成功しなかつた。双方が精銳驍勇げうゆう、死物狂ひを極めきは尽した活動写真的の此の華しい騎馬戦も、将門方の一騎士が結城寺の前で敵が不意打に來たなど悟つて、良兼方の騎士の後から尾行びかうして居て、鴨橋かもはし（今の結城郡新ゆふき宿村しんじゆくのかま橋）から急に駈抜かけぬけて注進したため、危くも将門は勝を得てしまつた。良兼は此の失敗に多く勇士を失ひ、氣屈して、勢衰へ、快々いきはひ《あう／＼》として樂まず、其後は何も仕出しだし得ず、翌年天慶二年の六月上旬病死して終しまつた。子春丸は事あらはれて、不意討の日から幾程も無く捕へられて殺されてしまつた。

突騎襲撃の不成功に終つた翌年の春、良兼は手を出すことも出

来無くなつてゐるし、貞盛も為すこと無く居ねばならぬので、か
 くては果てじと、貞盛は京上りのぼを企てた。都へ行つて将門の横暴
 を訴へ、天威を藉かりてこれを亡ほろぼさうといふのである。将門はこ
 れを覚さとつて、貞盛に兎角とかく云ひこしらへさせては面倒であると、急
 に百余騎を率ひきゐて追駈けた。二月の二十九日、山道を心がけた貞
 盛に、信濃しなのの小ちひさがたがたの国分寺こくぶじの辺で追ひついて戦つた。貞盛も
 思ひ設けぬでは無かつたから防ぎ箭やを射つた。貞盛方の佗田真樹
 は戦死し、将門方の文屋ぶんやの好立よしたつは負傷したが助かつた。貞盛は
 辛からくも逃のがれて、遂つひに京いたに到り、将門暴威を振ふの始終を申立てた。
 此歳五月改元、天慶元年となつて、其の六月、朝廷より将門を召
 すの符を得て常陸に帰り、常陸介藤原維これちか幾かの手から将門に渡し

た。将門は符を得ても命を奉じ無かつた。維幾は貞盛のをばむしこ叔母婿であつた。

貞盛が京上りをした翌天慶二年の事である。武蔵の国にも紛ふんぜ擾うが生じた。これも当時の地方に於て綱紀の漸やうやゆるく弛ゆるんだことを

証拠立てるものであるが、それは武蔵権守興世王と、武蔵介経基と、足立郡司判官武芝とが葛藤かつとうを結んで解けぬことであつた。

武芝は武蔵むさしのくにのみやつこ国造の後で、足立あだちさいたま埼玉二郡は国中で早く開けたところであり、それから漸く人烟じんえん多くなつて、奥羽への官

道の多摩たま郡中の今の府中のあるところに庁が出来たのであるが、

武芝は旧家であつて、累代の恩威を積んでゐたから、当時中勢力のあつたものであらう、そこへ新あらたにごんのかみ権守になつた興世王と

新に介すけになつた経基とが来た。経基は清和源氏の祖で六孫王其人である。興世王とは如何なる人であるか、古より誰も余り言はぬが、既に王といはれて居り、又経基との地位の關係から考へて見ても、帝系に出で、二代目位か三代目位の人であらう。高望王が上総介、六孫王が武蔵介、およそかゝる身分の人がかゝる官に任ぜられたのは当時の習ならひであるから、興世王も蓋けだし然さう様いふ人と考へて失しつたう当でもあるまい。其頃桓武天皇様の御子万多親王の御子まさみの正躬王の御後には、住世すみよ、基世もとよ、助世ひさよ、尚世ひさよ、などいふ方があり、又正躬王御弟には保世やすよ、継世つぐよ、家世など皆世の字のついた方がたくさん沢山あり、又桓武天皇様の御子仲野親王の御子にも茂世すけよ、輔世すけよ、季世すゑよなど世のついた方がおいで沢山に御在であるところから推お

して考へると、興世王は或は前掲二親王の中のいづれかの後であつたかとも思へるが、系譜で見出さぬ以上は妄測まうそくは力が無い。

たゞ時代が丁度相応するので或はと思ふのである。日本外史や日

本史で見ると、いきなり「兇険にして乱を好む」とあつて、何と

なく熊坂長ちやうはん範はんか何ぞのやうに思へるが、何様どういふものであら

うか。扨さて此の興世王と経基とは、共に我がの強い勢いきほひの猛むさかしい人であ

つたと見え、前例では正任未だ到いたらざるの間は部に入る事を得ざ

るのであるのに、推おして部に入つて検視しようとした。武芝は年

来公務に恪勤かくきんして上しやう下かの噂も好いものであつたが、前例を申

して之を拒こほんだ。ところが、郡司ぐんじの分ぶん際さいで無礼千万であると、

兵力づくで強しひて入部し、国内を凋弊てうへいし、人民を損耗そんかうせしめ

んとした。武芝は敵せないから逃げかく匿れると、武芝の私物しぶつまで検封してしまつた。で、武芝は返還せまを逼ると、却かへつて干戈かんくわの備そなへをして頑ぐわんとして聴かず、暴を以て傲つた。是によつて国書生等ふは不ぢくわいくわ治悔過の一巻を作つて庁前に遺のこし、興世王等を謗そしり、国郡に其非違を分明にしたから、武蔵一国は大に不穩を呈した。そして経基と興世王ともまた必らずしも睦むつまじくは無く、様なことが隣国下総に聴えた。将門は国の守でも何でも無いが、今は勢威おのづから生じて、大親分のやうな調子で世に立つて居た。武蔵の騒がしいことを聞くと、武芝は近親では無いが、一つ扱つてやらう、といふ好意で郎等らうどうを率したへて武蔵へ赴おもむいた。武芝は喜んで本末を語り、将門と共に府に向つた。興世王と経基とは恰あたも狭服山かに在

つたが、興世王だけは既にすでに府あに在るに会ひ、將門は興世王と武芝とを和解せしめ、府衙ふがで各 数杯を傾けて居つたが、経基は未だ山北に在つた。其中武芝の従兵等は丁度経基の営所を囲んだやうになつた。経基は仲悪くして敵の如き思ひをなしてゐる武芝の従兵等が自分の営所を囲んだのを見て、たゞちに逃のがれ去つてしまつて、將門の言によりて武芝興世王等が和して自分一人を殺さうとするのであると合点した。そこで將門興世王を大おほいに恨んで、京に馳せ上つて、將門興世王謀反の企くはだてを致し居る由を太政官に訴へた。六孫王の言であるから忽ち信ぜられた。將門が兵を動かして威を奮つてゐることは、既に源護、平良兼、平貞盛等の訴うつたへによりて、かねて知れて居るところへ、経基が此言によつて、今までのさま

／＼の事は濃い陰影をなして、新らしい非常事態をクツキリと浮みあらはした。

将門の方は和解の事画餅ぐわへいに属して、おもしろくも無く石井に帰つたが、三月九日の経基の讒奏ざんそうは、自分に取つて一ひと方かたならぬ運命の転換を齎もたらして居るとも知る由よし無くて居た。都ではかねてより阪東が騒がしかつた上に愈々《いよ／＼》謀反といふことであるから、容易ならぬ事と公卿くぎやう諸司の詮議に上つたことであらう。同月二十五日、太政大臣忠平から、中宮少進多治真人ちゆうぐうせうしんたぢまびと助真すけざねに事の実否を挙ぐべき由の教書を寄せ、将門を責めた。将門も謀反とあつては驚いたことであらうが、たとひ驕傲けうがうにせよ實際まだ謀反をしたのでは無いから、常陸下総下毛武蔵上毛五箇

国の解文げもんを取つて、謀反の事の無実の由を、五月二日を以て申出た。余国は知らず、常陸から此の解文は出しさうも無いことであつた。少くとも常陸では、将門謀反の由の言を幸ひとして、虚きよま妄うにせよ将門を誣しひて陥おとしれさうなところである。貞盛の姑夫をばむこたる藤原維幾が、将門に好感情を有してゐる筈は無いが、まさか未だ嘗いまて謀反もして居らぬ者に謀反の大罪を与へることは出来兼ねて解文を出したか、それとも短兵急に将門から攻められることを恐れて、責め逼せまらるゝまゝに己むを得ず出したか、一寸奇異ちよつとに思はれる。然し五箇国の解文が出て見れば、経基の言はあつても、差当り将門を責むべくも無く、實際また経基の言は未然を察すして中あたつてゐるとは云へ、興世王武芝等の間の和解を勧めすに來た

者を、目前の形勢を自分が誤解して、はいちゆう 盃 中 の蛇影に驚き、恨
 みを二人に含んで、誣しひるに謀反を以てしたのではあるから、
 「虚言を心中に巧みにし」と将門記の文にある通りで、将門の罪
 せらる可べき理拠は無い。又若もし実際将門が謀反を敢あへてしようとし
 て居たならば、不軌ふきを凶はかるほどの者が、打解けて語らつたことも
 無い興世王や経基の処へわざ／＼出掛けて、半日片時へんしの間に経基
 に見破らるべき間拔さをあらはす筈はずも無いから、此時は未だ叛を
 凶はかつたとは云へない。むしろ種 の事情が分つて見れば、東国に
 於ける将門の勢威を致した其の材幹力量は多とすべきであるから、
 是かくの如き才を草さうらい 菜に埋めて置かないで、下総守になり鎮守府ちんじゆふ
 将軍になりして其父の後を襲つがせ、朝廷の為に用を為させた方が、

才に任じ能を挙ぐる所以ゆゑんの道である、それで或は将門を薦すすむる者もあり、或は将門の為に功果ある可きの由が廷に議せられたことも有つたか知れない、記に「諸国の告状に依り、将門の為に功果有るべきの由宮中に議せらるゝ」と記されて居るのも、虚きよまう妄まうで無くて、有り得べきことである。備前介藤原子高たねたかを殺し播はりま磨介島田惟幹これもとを殺した後にさへ、純友は従五位を授けられんとしてゐる、其は天慶二年の事である。何にせよ善よかれ悪あしかれ将門は経基の訴の後、大なる問題おほい、注意人物の雄ゆうとして京師の人に認められたに疑無いから、経基の言は将門の運命に取つては一転換の機を為してゐるのである。

良兼は今はもう将門の敵たるに堪へ無くなつて、此年六月上旬

病死して居るのであるが、死前には病牀に臥しながら鬚髪を除いて入道したといふから、是も亦一可憐の好老爺だつたらうと思はれる。貞盛は良兼には死なれ、孤影蕭然、たゞ叔母婿の維幾を頼みにして、将門の眼を忍び、常陸の彼方此方に憂き月日を送つて居た。良兼が死んでは、下総一国は全く将門の旗下になつた。

興世王は経基が去つて後も武蔵に居たが、経基の奏によつておのづから上の御覚えは宜くなかつたことだらう、別に推問を受けた記事も見えぬが、新に興世王の上に一官人が下つて来た。それは百済貞連といふもので、目下の者とさへ睦ぶことの出来なかつた興世王だから、どうして目上の者と親しむことが成らう、忽

ち衝突してしまつた。ところが貞連は意有つてか無心でか知らぬが、まるで興世王を相手にしないで、庁に坐位をも得せしめぬほどにした。上には上があり、強い者には強いものがぶつかる。興世王もこれには憤然ふんぜんとせざるを得なかつたが、根が負け嫌ひの、恐ろしいところの有る人として、それなら汝きさまも勝手にしろ、乃公おれも勝手にするといつた調子なのだらう、官も任地も有つたものではない、ぶらりと武蔵を出て下総へ遊びに来て、将門の許に「居てやるんだぞぐらゐな居ゐ候くらふ」になつた。「王の居候」だからおもしろい。「置おき候くらふ」の相馬小次郎は我武者に強いばかりの男では無い、幼少から浮世の塩はたと嘗なめて居る苦勞くろう人だ。田原藤太に尋ねられた時の様子でも分るが、ようございますとも、

いつまでも遊んでおいでなさい位の挨拶で快く置いた。誰にでも突掛かりたがる興世王も、大親分然たる小次郎の太ッ腹なところは性に合つたと見えて、其儘遊んで居た。多分二人で地酒をおほさかづき大酒盃かなんかで飲んで、都出の興世王は、どうも酒だけは西が好い、いくら馬処の相馬の酒だつて、頭の中でピン／＼跳ねるのはあやまる、将門、お前の顔は七ツに見えるぜ、なんのかのと管でも巻いてゐたか何様か知らないが、細くない根性の者同士、喧嘩もせず暮して居た。

大親分も好いが、縄張が広くなれば出入りも多くなる道理で、人に立てられ、ば人の苦勞も背負つてやらねばならない。こゝに常陸の国に藤原玄明といふ者があつた。元來が此は是れ一個の

魔君で、余り性の良い者では無かつた。凶太くて、いらひどくて、
 人をあやめることを何とも思はないで、公に背くことを心持が好
 い位に心得て、やゝもすれば上には反抗して強がり、下には弱み
 に付入つて劫やかし、租税もくすねれば、押借りも為ようといふ
 質で、丁度幕末の悪侍といふのだが、度胸だけは咩と堪へた
 ところのある始末にいかぬ奴だつた。善悪無差別の悪平等の
 見地に立つて居るやうな男だが、それでも人の物を奪つて吾が妻
 子に呉れてやり、金持の懐中を絞つて手下には潤ひをつけてや
 るところが感心な位のものだつた。で、こくめいな長官藤原維幾
 は、玄明が私した官物を弁償せしめんが為に、度の移牒を送つ
 たが、斯様いふ男だから、横道に構へ込んで出頭などはしない。

末には維幾も勘忍し兼ねて、官符を発して召捕るよりほか無いとなつて其の手配をした。召捕られては敵かなはないから急に妻子を連れて、維幾と余り親しくは無い将門が丁度隣国ちやうどに居るを幸さいはひに、下総の豊田、即ち将門の拠処に逃げ込んだが、行掛ゆきがの駄賃にしたのだから初対面てみやげの手土産にしたのだから、常陸の行方郡河内郡なめかた かはちの不動倉ほしひの糶ほしひなどといふ平常は官でも手をつけてはならぬ筈きのものを搔かつさら浚さらつて、常陸の国ばかりに日は照らぬと極きめ込んだ。勿論これだけの事をしたのには、維幾との間に一通りで無いいきさつが有つたからだらうが、何にせよ悪あくらつ辣らつな奴だ。維幾は怒つて下総の官員にも将門にも移牒いいてふして、玄明を捕へて引渡せと申送つた。ところが尋常一様の吏員の手におへるやうな玄明では無い。

いつも逃亡致したといふ返辞のみが維幾の所へは来た。維幾も後には業を煮やして、下総へ潜かに踏込んで、玄明と一合戦して取りひし、挫いで、叩き斫るか生捕るかしてやらうと息巻いた。維幾も常陸介、子息為憲もきかぬ気の若者、官権実力共に有る男だ。斯様なつては玄明は維幾に敵することは出来無い。そこで眼も光り口も利ける奴だから、将門よりほかに頼む人は無いと、将門の処へ駈込んで、何様ぞ御助け下さいと、切りに将門を拜み倒した。元来親分気のある将門が、首を垂れ膝を折つて頼まれて見ると、余り香ばしくは無いと思ひながらも、仕方が無い、口をきいてやらう、といふことになつた。居候の興世王は面白づくに、親分、縋つて来る者を突出す訳にはいかねえぢや有りませんか位の事を云

つたらう。で、玄明は気が強くなつた。将門は常陸ひたちは元もとから敵にした国ではあり、また維幾は貞盛の縁者ではあり、貞盛だつて今に維幾の裾すその蔭そでか袖そでの蔭そでに居るのであるから、うつかり常陸へは行かれない。興世王はじめ皆相談にあづかつたに相違ないが、好うございませは、事と品とによれば刃金はがねと鐔つばとが挨あい拶さつを仕合ふばかりです、といふ者が多かつたのだらう、とう／＼天慶二年十一月廿一日常陸の国へ相馬小次郎らうだう党ひきを率ひきゐて押出した。興世王ばかりではあるまい、平常むだ飯を食つて居る者が、桃太郎のお供の猿や犬のやうな顔をして出掛けたに違無い。維幾の方でも知らぬ事は無い、十分に兵を用意した。将門は、件くだんの玄明下総に入つたる以上は下総に住せしめ、踏込んで追捕すること無きやう

にありたいと申込んだ。維幾の方にも貞盛なり国香なりの一まき
 が居たらう。維幾は将門の申込に對して、折角の御申状で
 はあるが承引致し申さぬ、とかう仰せらるゝならば公の力、刀の
 上で此方心のまゝに致すまで、と刎付けた。然らば、然らば、を
 双方で言つて終つたから、論は無しい、後は斫合きりあひだ。揉合もみあひ押合
 つた末は、玄明の手引てびきがあるので将門の方が利を得た。大日本史
 や、記に「将門撃つて三千人を殺す」とあるのは大袈裟過ぎるや
 うだが、敵将維幾を生捕いけどりにし、官の印いんやく鑰を奪ひ、財宝を多く
 奪ひ、営舎を焚やき、凱歌がいかを挙あげて、二十九日に豊田郡の鎌輪かまわ、即
 ち今の鎌庭に歸つた。勢いきほひといふ条、こゝに至つては既に遣り過ぎ
 た。大親分も宜よいけれども、奉行ぶぎやうや代官を相手にして談判をし

た末、向ふが承知せぬのを、此こ奴やつめといふので生捕りにして、役やく宅たくを焚くき、分捕りをして還かへつたといふのでは、余り強過ぎる。

玄明の事の起らぬ前、官符があるのであるから、将門が微力であるか維幾が猛威を有してゐるならば、将門は先づ維幾のために促うながされて都へ出て、糺きうもん問されねばならぬ筈の身である。それが有つたからといふのも一つの事情か知らぬが、又貞盛縁類といふことも一ツの理由か知らぬが、又打つてかゝつて来たからといふのも一の所以いはれか知らぬが、常陸介を生捕り国庁を荒し、掠りやく奪だつ焚ん焼せうを敢てし、言はず語らず一國を掌しやう握あくしたのは、相馬小次郎も凶に乗つて暴あばれ過ぎた。裏面の情は問ふに及ばず、表面の事は乱賊の所行だ。大小は違ふが此類の事の諸国にあつたのは時

代的の一現象であつたに疑無いけれど、これでは叛意が有る無い
 にかゝはらず、大盗の所為、又は暴挙といふべきものである。今
 で云へば県庁を襲撃し、県令を生擒いけどりし、国庫に入る可べき財物を
 掠奪したのに当るから、心を天位に掛けぬまでも大罪に相違無い。
 将門は玄明、興世王なんどの遣やり口くちを大規模にしたのである。将
 門猶なほ未いまだ僭せんせずといへども、既すでに叛したのである。純友の暴発
 も蓋けだし此か様ういふ調子なのであつたらう。延喜年間に盗の為に殺さ
 れた前さき安あ芸きの守のかみ伴光行、飛ひだ驩のかみ守藤原辰忠、上かう野づ介けのすけ藤原厚
 載むさし、武蔵守高向利春などいふものも、蓋けだし維い幾げが生擒いけどりされた
 やうな状態であつたらう。孔こう孟まうの道は尊たばれたやうでも、実は
 文章詩賦が流は行やつたのみで、仏教は尊崇されたやうでも、実は現

世きたう祈いた禱うのみ盛さかんで、事こと實じつに於おて神しん祠し巫む覲びんの徒だけと妥た協けいを遂すげ、貴き族ぞく
 に迎むか合あひ、甚はなしく平へい等とうの思し想さうに欠かけ、人ひとは恋こ愛あいの奴やつ隸れい、虚こ榮うの
 従したが僕はやくとなつて納なまり返かへり、大だい臣しんからしてが賭かけをして他ひとの妻つまを取とる
 ほど博ばく奕ち思し想さうは行いはれ、官くわん吏りは唯ただ民たみに對たいする誅ちゆう求きうと上じやうに對たいす
 る阿あ諛ゆとを事こととしてゐる、かゝる世よの中ちゆうに腕うで節ふしの強つよい者ものの腕うでが
 鳴ならずに居ゐられよう歟や。此この世よの中ちゆうの表へ裏うらを看みて取とつて、構かまふも
 のか、といふ腹はらになつて居ゐる者ものは決かして少すくくは無なく、悪あく平へい等とうや撥は
 無む邪じや正せいの感かん情じやうに不知しらず不ふ識し陷ちいつて居ゐた者ものも所しよ在ざいにあつたらう。將じやう門もん
 が恰あたも水すい滸こ伝でん中ちゆうの豪ごう傑てつが危あやしい目めに度た逢あつて終つひに官くわんに抗かうし威いを
 張たるやうな徑けい路ろを取とつたのも、考かうへれば考かうへどころはあある。特とくに
 長ながい間かん引ひ続ついた私し鬪とうの敵かたうど方かたうど荷かたうど担たん人ひとの維い幾けいが向むかふへまはつて互たがひに正せい

面からぶつかつたのだから堪らない。此方が勝たなければ彼方が勝ち、彼方が負けなければ此方が負け、下手にまごつければ前の降間木につぐんだ時のやうな目に遇ふのだらう。玄明をかくまつた行懸りばかりでは無い、自分の頸にも繩の一端はかゝつてゐるものだから、向ふの頸にも繩の一端をかづかせて頸骨の強さくらべの頸引をして、そして敵をのめらせて敲きつけたのだ。常陸下総といへば人気はどちらも阪東氣質で、山城大和のやうに柔らかなところでは無い。野山に生へる杉の樹や松の樹までが、常陸ツ木下総ツ木といへば、大工さんが今も顔をしかめる位で、後年の長脇差の侠客も大抵利根川沿岸で血の雨を降らせあつてゐるのだ。神道徳次は小貝川の傍、飯岡の助五郎、笹川の繁蔵、

銚子てうしの五郎蔵と、数へ立つたら、指がくたびれる程だ。元來が斯か
 様ういふ土地なので、源平時分でも徳川時分でも變りは無いから、
 平安朝時代でも異ことなつては居ないらしい。現に将門の叔父の村岡
 五郎の孫の上総介忠常も、武蔵押領使あふりやうし、日本將軍と威張り出し
 て、長元年間には上総下総安房を切従へ、朝廷の兵を引受けて二
 年も戦ひ、これも叛臣伝中の人物となつてゐる。かういふ土地、
 かういふ時勢、かういふ思潮、かういふ内情、かういふ行懸りゆきがゝり、
 興世王や玄明のやうなかういふ手下、とう／＼火事は大きな風に
 煽あふられて大きな燃えくさに甚はなはだしい焰ほのほを揚あげるに至つた。もうい
 けない。将門は毒酒に酔つた。興世王は将門むかに對つて、一国を取
 るも罪は赦ゆるさるべくも無い、同じくば阪東を併あはせて取つて、世の

気色を見んには如しかじと云ひ出すと、如何いかにも然さう様だ、と合点し
 て終しまつた。興世王は実いに好い居候だ。親分をもり立て、大きくし
 ようと心掛けたのだ。天井が高くなければ頭を聳そびえさせる訳には
 行かない。蔭で親分を悪く言ひながら、台所で偷ぬすみ酒をするやう
 な居候とは少し違つて居た。併しかし此の居候のお蔭で将門は段 罪
 を大きくした。興世王の言を聞くと、もとより焰えんせう硝せうは沢たく山さんに
 籠こもつて居た大おほづ筒づだから、口火がついては容よう赦しやは無い。ウム、
 如何にも、いやしくも将門、刹さつていり帝利ていりの苗べうえい裔えい三世の末葉である、
 事を挙あぐるもいはれ無しとはいふ可からず、いで先たなづ掌そこに八箇国
 を握つて腰に万民を附けん、と大きく出た。かう出るだらうと思
 つて、そこで性に合つて居た興世王だから、イヨー親分、と喜ん

で働き出した。藤原の玄明や文室ぶんやの好立等のいきり立つたことも
 言ふ迄は無い。ソレツといふので下野国へと押出した。馬を駈け
 させては馬場所うまばしよの士さむらひだ。将門が猛威を張つたのは、大小の差こ
 そあれ大元だいげんが猛威を振ふるつたのと同じく騎隊を駆使したためで、
 古代に於ては汽車汽船自動車飛行機のある訳では無いから、驍勇
 な騎士を用ゐれば、其の速力や負担力ふたんりよくに於て歩兵ほへいしに陪蕪ばいしするか
 ら、兵力は個数に於て少くて実量に於て多いことになる。下総は
 延喜式で左馬寮御牧貢馬地さまれうみまきこうばちとして、信濃上野甲斐武蔵の下に在る
 やうに見えるが、兵部省ひやうぶしやう諸国馬牛牧ほくしき式を見ると、高津牧たかつ、
 大結牧おとむす、本島牧もとじま、長州牧など、沢山な牧まきがあつて、兵部省へ貢こ
 馬うばしたものである。鎌倉時代足利時代から徳川時代へかけて、地

勢上奥羽と同じく産馬地として鳴つて居る。特に將門は武人、此の牧場多き地に生長して居れば、十分に馬政にも注意し、騎隊の利をも用ゐるに怠らなかつたらう。

天慶の二年十一月二十一日に常陸を打従へて、すぐ其の翌月の十一日出発した。馬は竜の如く、人は雲の如く、勇威凜りんくと取つてかゝつたので、下野の国司は辟へきえき易した。経基の奏の後、阪東諸国の守や介は新らしい人に換かへられたが、斯かう様いふ時になると新任者は勝手に不案内で、前任者は責任の解けたことであるから、いづれにしても不便利であつて、下野の新司の藤原の公雅は抵抗し兼ねて印いんやく鑰を差出して降くだつて終しまつた。前司の大おほな中なか臣とみまさゆき全行も敵対し無かつた。国司の館やかたも国府も悉ことごとく虜りよりやく掠りやくさ

れて終ひ、公雅は涙顔天を仰ぐ能はず、すごくと東山道を都へ
 逃れ去つた。同月十五日馬を進めて上野へ将門等は出た。介の藤
 原尚範も印鑰いんやくを奪はれて終つた。十九日国庁に入り、四門の陣
 を固めて、将門を首め興世王、藤原玄茂等堂と居流れた。(玄
 茂も常陸の者である、蓋し玄明の一族、或は玄茂即玄明であらう
)。此時、此等の大變に感じて精神異常を起したもののか、それと
 も玄明等若しくは何人かの使曠しそつに出でたか知らぬが、一伎あらは
 れ出で、神がりの状になり、八幡大菩薩はちまんだいぼさつの使者と口走り、
 多勢の中で揚言して、八幡大菩薩、位を蔭子将門くらゐ いんしに授く、左大臣
 正二位菅原道真朝臣みちぎねあそん之を奉ず、と云つた。一軍は訳も無く忻きんき
 喜雀躍した。興世王や玄茂等は将門を勧めた。将門は遂に神

旨を戴いた。四陣上下、こぞ挙つて将門を拜して、歡呼の声は天地を動かした。

此の仕掛しかけ花火はなびは唯が製造したか知らぬが、蓋し興世玄明の輩やからだらう。理屈は兎もとあれ景氣の好い面白い花火が揚あがれば群衆は喝かつさ采いするものである。群衆心理なぞと近頃しかつめらしく言ふが、人は時の拍子にかゝると途方も無いことを共感協行するものである。昔はそれを通り魔の所為だの天狗てんぐの所為だのと言つたものである。群衆といふことは一体鰯むくどりだの椋からす鳥にしんだの鴉からすだの鯨にしんだのの如きものの好んで為すところで、群衆に依よつて自族を支へるが、個体となつては余りに弱小なもの取る道である。人間に在つても、立教者は孤独で信教者は群集、勇者は独往し怯けふしや者は同行する、

創作者は独自で模倣者もはうしやは群集、智者は寥すく 《れうく》、愚者
 は多 であつて、群衆して居るといへば既にすでそれは弱小蠢愚しゆんぐの
 者なる事を現はして居る位のものである。群衆心理は即ち衆愚心すなは
 理なのであるから、皆自から主たる能あたはざるほどの者共が、相あひひ
 率きめて下らぬ事を信じたり、下らぬ事を怒つたり悲しんだり喜
 んだり、下らぬ行動を敢あへてしたりしても何も異とするには足らな
 い。魚は先頭魚の後へついて行き、鳥は先発鳥の後へつくもので
 ある。群衆は感の一致から妄従妄動するもので、浅野内匠頭たくみのかみの
 家は潰つぶされ城は召上げられると聞いた時、一二が籠城して戦死し
 ようと云へば、皆争つて籠城戦死しようとしたのが即ち群衆心理
 である。其実は主家の為に忠に死するに至つた者は終つひに何程も有

りはし無かつた。感の一致が月日の立つと共に破れると、御金配分を受けて何処かへ行つてしまふのが却つて本態だつたのである。そこで衆愚心理を見破つて、これを正しく用ゐるのが良い政治家や軍人で、これを吾が都合上に用ゐるのが奸雄や煽動家である。八幡大菩薩の御託宣は群衆を動かした。群衆は無茶に飲んだ。将門は新皇と祭り上げられた。通り魔の所為だ、天狗の所為だ。衆愚心理は巨浪を猿島に持上げてしまつた。将門は毒酒を甘しとして其の第二盃を仰いでしまつた。

道真公が此処へ陪賓として引張り出されたのも面白い。公の貶謫と死とは余ほど当時の人心に響を与へてゐたに疑無い。現に榮えてゐる藤原氏の反対側の公の亡霊の威を藉りたなどは一

寸をかしい。たゞ将門が菅公薨こうきよよ去の年に生れたといふ因縁で、
 持出したのでもあるまい。本来託宣といふことは僧道巫覡ふげきの徒の
 常套で、有り難過ぎて勿体無いことであるが、迷信流行の当時に
 は託宣は笑ふ可べきことでは無かつたのである。現に将門を滅ぼす
 祈きたう禱をした叡えい山の明めい達阿闍梨あじやりの如きも、松尾明神の託宣に、
 明達は阿倍仲丸の生れがはりであるとおつたといふことが扶桑ふさう
 略記やくきに見えてゐるが、これなどは随分變へん挺ていな御託宣だ。宇佐
 八幡の御託宣は名高いが、あれは別として、一体神がゝり御託宣
 の事は日本に古伝のあることであつて、当時の人は多く信じてゐ
 たのである。此の八幡託宣は一場の喜劇の如くで、其の脚色者も
 想像すれば想像されることではあるが、或は又別に作者があつた

のでは無く、偶然に起つたことかも知れない。古より東国には未だ曾て無い大動揺が火の如くに起つて、瞬く間に無位無官の相馬小次郎が下総常陸上野下野を席捲したのだから、感じ易い人の心が激動して、発狂状態になり、斯様なことを口走つたかとも思はれる。然らば、一時の賞賜を得ようとして、斯様なことを妄言するに至つたのかも知れない。

田原藤太が将門を訪ふた談は、此の前後の事であらう。秀郷

は下野掾で、六位に過ぎぬ。左大臣魚名の後で、地方に蟠

踞して威望を有して居たらうが、これもたゞの人ではない。何

事の罪を犯したか知らぬが、延喜十六年八月十二日に配流された
とある。同時に罪を得たものは、同国人で同姓の兼有、高郷、

興おきさだ 貞等十八人とあるから、何か可なりの事件に本もとづいたに相違
 無い。日本紀略にも罪状は出て居らぬが、都まで通つた悪事でも
 あり、人数も多いから、いづれ党を組み力を戮あはせて為した事だらう。
 何にしても前科者だ、一ひとすぢ筋で行く男では無い。将門を訪はなふた談
 は、時代ちがひの吾妻鏡あづまかぐみの治承四年九月十九日の条に、昔話と
 して出て居るので、「藤原秀郷、偽いつはりて門客に列べす可よきの由よしを
 称をし、彼の陣に入るの処、将門喜悅の余り、梳くしけづるところの髪
 を肆そはらず、即ち烏帽子に引入れて之に謁えつす。秀郷其の軽忽なるを
 見、誅ちゆうばつ 罰ばつす可べきの趣おもむきを存ぞんじ退出し、本意の如く其首を獲たり
 云」といふので、源平盛衰記には、「将門と同意して朝家を傾
 け奉り、日本国を同心に知らんと思ひて、行向かくひて角かくといふ」と

卷二十二に書き出して、世に伝へたる髪の毛の事、飯粒の事を書いて居る。盛衰記に書いてある通りならば、秀郷は随分怪けしからぬ料れ簡方うけんかたの男で、興世王の事を為なさずして終つたが、興世王の心を懐いだいてゐた人だと思はれる。斎藤竹堂が論じた如く、秀郷の事跡を觀みれば朝敵を対治したので立派であるが、其の心術を考へれば悪にくむべきところのあるものである。然し源平盛衰記の文を証にしたり、日本外史を引いて論じられては、是非も共に皆非であつて、田原藤太も迷惑だらう。吾妻鏡は「偽はりて称す云」と記し、大日本史は「秀郷陽に之に応じ、其の營いに造いたりて謁を通ず」と記してゐる。此の意味で云へば、将門の勢いきほひが浩かうだい大で、独力之を支ふる事が出来無かつたから、下野掾の身ではあるが、尺せきくわく蠖

の一時を屈して、差当つての難を免れ、後の便宜にもとの意で将門もとの許もとを訪とふたといふのであるから、咎とがむべきでは無い。竹堂の論もむだ言である。が、盛衰記の記事が真相を得て居るのだらうか、大日本史の記事の方が真相を得て居るだらうか。秀郷の後の千晴ちはるは、安和年中、橘繁延たちばなゆけのぶ僧連れんも茂と廃立はかを謀るに坐して隱岐に流されたし、秀郷自身も前に何かの罪を犯してゐるし、時代の風気をも考へ合せて見ると、或は盛衰記の記事、竹堂の論の方が当つて居るかと思へる。然し確証の無いことを深刻に論ずるのは感心出来無いことだ、憚はげるべきことだ、田原藤太を強しひて、何方どちらへ賭かけようかと考へた博奕打ばくちうちにするには当らない。

将門おに逐おひ立てられた官人連は都へ上る、諸国くしよりは櫛くしの齒くしを

ひくが如く注進がある。京師では驚愕きやうがくと憂慮と、応変の処置の手配てくぱりとに沸立わきたつた。東国では貞盛等は潜伏し、維幾は二十九年以来鎌輪に幽囚された。

将門は旧恩ある太政大臣忠平へ書状を発した。其書は満腔まんかうの鬱気うつきを伸べ、思ふ存分のことを書いて居るが、静かに味はつて見ると、強い言の中に柔らかな情があり、穏やかに委曲みきよくを尽してゐる中に手強いところがあつて中 面白い。

将門つし謹しみ言まをす。貴誨きくわいを蒙かうむらずして、星霜多く改まる、渴望の至り、造次ざうじに何いかでか言まをさん。伏して高察を賜はらば、恩幸なり恩幸なり。「然れば先年源護等の愁状に依りて将門を召さる。官符をかしこみ、忿しやうぜん然として道に上り、祇候しこうする

の間、仰せ奉りて云はく、将門之事、既に恩沢に霑うるほひぬ。仍よつて早く返し遣やる者なりとなれば、旧堵きうとに帰着し、兵事を忘却し、弓弦を緩ゆるくして安居しぬ。一然る間に前下総国さきの介平良兼、数千の兵を起し、将門を襲ひ攻む。将門背走相防ぐ能はざるの間、良兼の為に人物を殺さつ損そん奪だつ掠りやくせらるゝの由よしは、具つぶさに下総国の解文げもんに注し、官に言ごんじやう上しぬ、爰こゝに朝家諸国に勢せいを合して良兼等を追捕す可きの官符を下され了をはんぬ。而しかるに更に将門等を召すの使を給はる、然るに心安からざるに依りて、遂に道に上らず、官使英保純行に付いて、由を具ぐして言上し了んぬ。未だ報裁かうむを蒙らず、鬱うつ包ほうの際、今年の夏、同じく平貞盛、将門を召すの官符を奉じて常陸国いたに到り

ぬ。仍よつて国内しき頻りに将門に牒てふじゆつ述す。件くだんの貞盛は、追捕

を免れて跼きよくせき躄せきとして道に上れる者也、公家は須すべからく捕へ

て其の由を糺たゞさるべきに、而もかへつて理を得るの官符を給

はるとは、是尤も矯けうしよく飾しよくせらるゝ也。「又右少弁源相うせうべん みなもと

職朝臣すけとぎのあそん仰せの旨を引いて書状を送れり、詞に云はく、武

蔵介経基の告状により、定めて将門を推問すべきの後符あり

了んぬと。「詔使到来を待つころの比ほひ、常陸介藤原維幾朝あ

臣そんの息男為憲、偏ひとへに公威を仮りて、ただ冤枉ゑんわうを好む。爰こゝに

将門の従兵藤原玄明の愁訴により、将門其事を聞かんが為に

彼国に発向せり。而るに為憲と貞盛等と心を同じうし、三千

余の精兵を率ゐて、恣ほしいまに兵庫の器仗きちやうじゆうぐ戎具じゆうぐ並びたてに楯等を出

して戦を挑む。是に於て将門士卒を励まし意気を起し、為憲の軍兵を討伏せ了んぬ。時に州を領するの間滅亡する者其数幾許なるを知らず、況んや存命の黎庶は、尽く将門の爲に虜獲せらるゝ也。「介の維幾、息男為憲を教へずして、兵乱に及ばしめしの由は、伏して過状を弁じ了んぬ。将門本意にあらずと雖も、一国を討滅しぬれば、罪科輕からず、百県に及ぶべし。之によりて朝議を候ふの間、しばらく坂東の諸国を虜掠し了んぬ。「伏して昭穆を案ずるに、将門は已に栢原帝王五代之孫なり、たとひ永く半国を領するとも、豈非運と謂はんや。昔兵威を振ひて天下を取る者は、皆史書に見るところ也。将門天の与ふるところ既に武芸に在り、

等輩を思惟するに誰か将門に比およばんや。而るに公家褒賞の由無く、屢しばしば譴けん責せきの符を下さるゝは、身を省みるに恥多し、面目何ぞ施さん。推して之を察したまはば、甚だ以て幸さいはひなり。」

抑そもく将門少年の日、名簿を太政大殿に奉じ、数十年にして今に至りぬ。相しやう国こく撰せん政せいの世に意おもはざりき此事を挙げんとは。歎念の至り、言ふに勝たゆ可べからず。将門傾国の謀はかりごとを萌きざすと雖、何ぞ旧主を忘れんや。貴閣且つ之を察するを賜はらば甚だ幸なり。一を以て万つらぬを貫く。将門謹言。

天慶二年十二月十五

謹 上 太政大殿少将閣賀恩下

此状で見ると将門が申まをしわけ訳わけの為に京に上つた後、郷かへに還つて

おとなしくしてゐた様子は、「兵事を忘却し、弓弦を緩くして安居す」といふ語に明らかに見はれてゐる。そこを突然に良兼に襲はれて酷い目に遇つたことも事実だ。で、其時に将門は正式の訴状を出して其事を告げたから、朝廷からは良兼を追捕すべきの符が下つたのだ。然るに将門は公の手の廻るのを待たずに、良兼に復讐戦を試みたのか、或は良兼は常陸国から正式に解文を出して弁解したため追捕の事が已んだのを見て、勘忍ならずと常陸へ押寄せたのであつたらう。其時良兼が応じ戦は無いで筑波山へ籠つたのは、丁度将門が前に良兼に襲はれた時応戦し無かつたやうなもので、公辺に對して自分を理に敵を非に置かうとしたのであつた。将門は腹立紛れに乱暴して歸つたから、今度は

常陸方から解文げぶんを上して将門を訴へた。で、将門の方へ官符が来て召問はるべきことになつたのだ。事情が紛糾ふんきょうして分らないから、官使純行等三人は其時東国へ下向したのである。将門は弁解した、上京はしなかつた。そこへ又後から貞盛は将門の横暴を直ぢ訴きそして頂戴した将門追捕の官符を持つて歸つて来たのである。これで極きはめて鮮あややかに前後の事情は分る。貞盛は将門追捕の符を持つて歸つたが、将門の方から云へば貞盛は良兼追捕の符の下つた時、良兼同罪であつて同じく配符の廻つて居た者だから、追捕を逃れ上京した時、公に於て取押へて糺問きうもんさるべき者であるにかゝはらず、其者にとつて理屈の好い将門追捕の符を下さるゝとは怪けしからぬ矯飾けうしよくであるとつぱと突撥ねてゐるのである。こゝまでは将

門の言ふところに點頭の出来る情状と理路とがある。玄明の事に就ては少し無理があり、信じ難い情状がある。玄明を従兵といふのが奇異だ。行方河内両郡の食糧を奪つたものを執とらへんとするものを、冤ゑん枉わうを好むとは云ひ難い。為憲貞盛合体して兵を動かしたといふのは、蓋けだし事実であらうが、要するに維幾と対談に出かけたところからは、将門のむしやくしや腹の決裂である。此書の末の方には憤怨こんひ恨んと自暴の気味とがあるが、然し天位を何様どうしようの何のといふそんな気味は少しも無い。むしろ、乱暴はしました。が同情なすつても宜よいではありませんか、あなたには御氣の毒だが、男児として仕方が無いぢやありませんか、といふ調子で、将門が我武者一方で無いことを現はしてゐて愛す可べきである。

将門は厭いやな浮世絵に描かれた如き我武者一方の男では無い。将門の弟の将平は将門よりも又やさしい。将門が新皇と立てられるのを諫いさめて、帝王の業は智慧ちゑ力量の致すべきでは無い、蒼さう天てんもし与くみせずんば智力また何をか為なさんと、と云つたとある。至言である。好人である。斯かう様いふ弟が有つては、日本ではだめだが国柄によつては将門も真実の天子となれたかも知れない。弓削ゆげのだうき道鏡やうの一類には玄賓僧都げんぴんそうづがあり、清盛の子に重盛があり、将門の弟に将平の有つたのは何といふ面白い造物の脚色だらう。何様うも戯曲には真の歴史は無いが、歴史には却かへつて好い戯曲がある。将門の家隸けらいの伊和員経いわのかずつねといふ者も、物静かに将門を諫めたといふ。然し将門は将平を迂誕うたんだといひ、員経を心無き者だといつて

容れなかつた由だが、火事もこゝまで燃えほこつては、救はんとするも焦頭爛頭あるのみだ。「とゞの詰りは真白な灰」になつて何も浮世の埒が明くのである。「上戸も死ねば下戸も死ぬ風邪」で、毒酒の美さに跡引上戸となつた将門も大醉淋漓で島広山に打倒れ、ば、「番茶に笑んで世を軽う視る」といつた調子の洒落れた将平も何様なつたか分らない。四角な蟹、円い蟹、「生きて居る間のおのくの形」を果敢なく浪の来ぬ間の沙に痕つけたまでだ。

将平員経のみではあるまい、群衆心理に摂取されない者は、或は口に出して諫め、或は心に秘めて非としたらうが、興世王や玄茂が事を用ゐて、除目が行はれた。将門の弟の将頼は下野守に、

上野守に常羽御厩別当多治経明を、常陸守に藤原玄茂を、上総守に興世王を、安房守に文室好立を、相模守に平将文を、伊豆守に平将武を、下総守に平将為を、それ／＼の受領が定められた。

毒酒の宴は愈はづんで来た。下総の亭南ていなみ、今の岡田の国生村くにぶあたりが都になる訳で、今の葛飾かつしかの柳橋か否か疑はしいがふなば

橋しといふところを京の山崎なぞに擬らへ、相馬の大井津、今の大井

村を京の大江に比し、こゝに新都が阪東に出来ることになつたら、景氣の好いことは夥おびたゞしい。浮浪人や配流人、なま学者や落魄らくは公卿くくげ、いろ／＼の奴が大臣にされたり、参議にされたり、雑穀屋の主人が大納言金時などと納まりかへれば、掃除屋が右大弁汲くみや安すなどすと威張り出す、出入の大工が木工頭もくのかみ、お針の亭主が縫ぬひ

殿頭の、山井庸仙やまゐる老が典藥頭、売卜いはずともあての岩洲友当おんやうが陰陽博士はかせになるといふ騒ぎ、たゞ曆日博士だけにはなれる者が無かつたと、
 京童きやうわらべが云つたらしい珍談が残つてゐる。

上総安房は早くも将門に降つたらう。武蔵相模は新皇親征とあつて、馬蹄憂かつく　大軍南に向つて発した。武蔵も論無く、相模も論無く降伏したらしく別に抵抗をした者の談はなしも残つて居ない。諸国が弱い者ばかりといふ訳ではあるまいが、一つには官の平生の処置えつづくに悦服えつづくして居なかつたといふ事情があつて、むしろ民庶は何様どんな新政しんせいが頭上づしやうに輝くかと思つたために、将門の方が勝つて見たら何様どうだらうぐらゐに心を持つてゐたのであらう。それで上野下野武蔵相模たちまちにして旧官は逐落おひおとされ、新軍は勢いきほひを得

たのかと想像される。相模よりさきへは行かなかつたらしいが、これは古の事で上野は碓氷うすひ、相模は箱根足柄あしがらが自然の境をなしてゐて、将門の方も先づそこらまで片づけて置けば一段落といふ訳だつたからだらう。相州秦野はたのあたりに、将門が都しようかとしたといふ伝説の残つてゐるのも、将門軍がしばらくの間彷徨したり駐屯したりしてゐた為に生じたことであらう。燎原れうげんの勢いきほひ、八ヶ国は瞬間にして馬蹄ばていの下になつてしまつた。實際平安朝は表面は衣冠束帯華奢くわしや風流で文明くさかつたが、伊勢物語や源氏物語が裏面をあらはしてゐる通り、十二単衣ひとへでぞべらくした女どもと、恋歌こひかや遊芸あぶらに身の膏あぶらを燃して居た雲雀骨ひばりぼねの弱公卿共よわくげとの天下であつて、日本各時代の中でも余り宜よろしく無く、美なること冠

玉の如くにして中空むなしきのみ世であり、やゝもすれば暗黒時代のやうに外面のみを見て評する人の多い鎌倉時代などよりも、中味は充実してゐない危い代であつたのは、将門ばかりでは無い純友などにも脆もろく西部を突崩されて居るのを見ても分る。元の忽クビ必ラ然イが少し早く生れて、平安朝に來襲したならば、相模太郎になつて西天を睥へい睥げいしてウムと堪こらへたものは公卿どもには無くつて、却かへつて相馬小次郎将門だつたかも知れはし無い。「荒壁つとに蔦のはじめや飾り縄」で、延喜式の出来た時は頼朝が頤あごで六十余州を指し揮きする種子たねがもう播まかれてあつたとも云へるし、源氏物語を讀んでは大江広元が生まれはない遙はるかに前に、氣運すの既すでに京畿けいに衰えてゐることを悟つた者が有つたかも知れないとも云へる。忠常の叛、

前九年、後三年の乱は、何故に起つた。直接には直接の理由が有らうが、間接には粉面涅齒でつしの公卿共がイソツプ物語の屋根の上の羊みたやうにして居たからだ。奥州藤原家が何時いつの間にか、「だんまり虫が壁を透すとほ」格で大きなものになつてゐたのも、何を語つてゐるかと云へば、「都のうつけ郭ほとゝぎす 公待つ」其間におとなしくどしどしと鋤すきくは鋤を動かして居たからだ。天下枢機すゐきの地に立つ者が平安朝ほど懦弱苟安こうあんで下らない事をしてゐたことは無い位だ。だから将門が火の手をあげると、八箇国はべたくとなつて、京では七斛余こくよの芥子けしを調伏祈祷ごまの護摩たに焚いて、将門の頓とんし死屯滅とんめつを祈いひつたらせたと云へられて居る。八箇国を一月ばかりに切従へられて、七斛こくの芥子けしを一七日に焚いたなどは、帯紐ゆゑの緩

み加減も随分太甚はなはだしい。

相模から歸つた將門は、天慶三年の正月中旬、敵の殘党が潜んでゐる虞おそれのある常陸へと出馬して鎮圧に力つとめた。丁度都では此時參議右衛門督藤原忠文を征東大將軍として、東征せしむることになつた。忠文は当時唯一の將材だつたので、後に純友征伐にも此人が挙げられて居る。忠文は命を受けた時、方まさに食事をしてゐたが、命を聞くと即時に箸はしを投じて起つて、節せつたう刀を受くるに及んで家に歸らずに発したといふ。生なまぬるい人のみ多かつた當時には立派な人だつた。しかし戦ふに及ばぬ間に將門が亡びたので賞に及ばなかつたのを恨んで、拳こぶしを握つて爪が手の甲にとほり、怨言を發して小野宮大臣を詛のろつたといふところなどは余り小さい。

将門が常陸へ入ると那珂久慈両郡なかくじの藤原氏どもは御馳走をして、へいこらへいこらをきめた。そこで貞盛為憲等の在処あつかを申せと責めたが、貞盛為憲等は此等の藤原氏どもに捕へられるほど間拔まぬけでも弱虫でも無かつた。其中将門軍の多治経明等の手で、貞盛の妻と源扶の妻を吉田郡の蒜間江ひるまえで捕へた。蒜間江は今の茨城郡の湍沼ぬである。

前には将門の妻が執とらへられ、今は貞盛の妻が執とらへられた。時計の針は十二時を指したかと思ふと六時を指すのだ。女等は衣類はぎまで剥取はぎとられて、みじめな態さまになつたが、この事を聞いた将門は良兼とは異つた性格をあらはした。流浪るろうの女人を本属にかへすは法式の恒例であると、相馬小次郎は法律に通じ、思ひやりに富んで

居た。衣ひとかさね一襲ひとかさねを与へて放ち還かへらしめ、且かつ一首の歌を詠じた。よそにても風のたよりに我ぞ問ふ枝離れたる花のやどりを、といふのである。貞盛の妻は恩を喜んで、よそにても花の句にほひの散り来れば吾が身わびしとおもほえぬかな、と返歌した。歌を詠よみかけられて返しをせぬと、七生唾おしにでもなるやうに思つてゐたらしい当時の人のことで此の返しはあつたのだらう。此歌此事を引掛けて、源護の家と将門との争鬪の因縁いんねんにでもこじつけると、古い浄瑠璃作者が喉のどを鳴らしさうな材料になる。扶の妻も歌を詠んだ。流石さすがに平安朝の句のする談で、吹きすさぶ風の中にも春の日は花の句のほのかなるかな、とでも云ひたい。清宮秀堅がこゝに心をとめて、「将門は凶暴といへども草賊と異なるものあり、良兼を

放てる也、父祖の像を觀て走れる也、貞盛扶の妻を辱はづかしめざる也」と云つて居るが、実に其の通りである。将門は時代が遠く事實が詳しく知れぬから、元龜天正あたりの人のやうに細かい想像をつけることは叶かなはぬが、何様どうも李自成やなんぞのやうなものでは無い。やはり日本人だから日本人だ。興世王や玄明を相手に大酒を飲んで、酔払くだつて管くださへ巻かなかつたらば、氏うちは異ちがふが鎮ちんぜん西い八郎やち為ため朝とものやうな人と後の者から愛慕あいぼされただらうと思はれる。

戯曲はこゝにまた一場ある。貞盛の妻は放はなされて何様どうしたらう。およそ情のある男女の間といふものは、不思議に離れてもまた合ふもので、虫むしが知らせるといふものか何どうか分らぬが、「慮おもつて

而して知るにあらざ、感じて而して然るなり」で、動物でも何でも牝ひんぼ牡雌雄が引分けられてもいつか互たがひに尋ねあて、一いつしよ所になる。銀杏いしてふの樹の雄樹と雌樹とが、五里六里離れて居てもやはり実を結ぶ。漢の高祖の若い時、あちこちと迷惑つて山の中などに隠れて居ても、妻の呂氏がいつでも尋ねあてた。それは高祖の居るところに雲気が立つて居たからだといふが、いくら卜ぼくしや者の娘だつて、こけの烏のやうに雲ばかりを当にしたでは無からう。あれ程の真黒焦の焼餅やきな位だから、吾が夫のことでヒステリーのやうになると、忽ちサイコメトリイ的、千里眼になつて、「吾が行へる寝ぬ夢に見る」で、あり／＼と分つて後追駈けたものであらうかも知れぬ。貞盛の妻もこゝでは憂き艱難しても夫にめぐり遇あひた

いところだ。やうやくめぐり遇つたとするとハツとばかりに取とりす継がる、流石さすがの常平太も女房の肩へ手をかけてホロリとするとこ
ろだ。そこで女房が敵陣の模様を語る。柔らかいしつとりとした
情合の中から、希望の火が燃え出して、扱さては敵陣手薄なりとや、
いで此機をはづさず討取りくれん、と勇氣身に溢あふれて常平太貞盛
が突つ立たち上ある、チヨン、チヨくくくくと幕が引けるところで、
一寸おもしろい。が、何の書にもかういふところは出て居ない。

然し実際に貞盛は将門の兵の寡すくないことをば、何様どうして知つたか
知り得たのである。将門精兵八千と伝へられてゐるが、此時は諸
国へ兵を分けて出したので、旗本は甚はなだ手薄だつた。貞盛はかね
て糸を引き謀はかりごとを通じあつてゐた秀郷ひでさとと、四千余人を率ゐて猛然

と起つた。二月一日矢合せになつた。将門の兵は千人に満たなかつたが、副將軍春茂（春茂は玄茂か）陣頭経明かつたか遂高、いづれも剛勇を以て誇つてゐる者どもで、秀郷等を見ると将門にも告げずに、それ駈散らせと打つて蒐かつた。秀郷、貞盛、為憲は兵を三手みてに分つて巧みに包围した。玄明等大敗して、下野下総界さかひより退いた。勝に乗じて秀郷の兵は未ひつじさる申ばかりに川口村に襲ひかゝつた。川口村は水口村みづくちむらあやまりの誤で下総の岡田郡である。将門はこゝで自から奮戦したが、官と賊との名は異なり、多くわと寡との勢は競いきほひきそは無いで退いた。秀郷貞盛は息をつかせず攻め立てた。勝てば助勢は出て来る、負ければ怯気おぢけはつく。将門の軍は日に衰へた。秀郷の兵は下総の堺、即ち今の境町まで十三日には取詰めた。敵を客

戦の地に置いて疲れさせ、吾が兵の他から帰り来るを待たうと、
 将門は見兵けんべい四百を率ゐて、例の飯沼のほとり、地勢の錯綜さくそうし
 たところに隠れた。秀郷等は偽宮を焼立て、敵の威を削り気を挫くじ
 いた。十四日将門は面相望むやうになつた。修羅心しゅらしんは互に
 頂上に達した。牙を咬み眼を瞋いからして、鎬しのぎを削り鏢つばを割つて争つ
 た。こゝで勝たずに日がたてば、秀郷等は却かへつて危ふくなるので
 あるから、死身になつて堪へ堪へたが、風は猛烈で眼もあけられ
 なかつたため、秀郷の軍は終つひに利を失つた。戦の潮しほ合あひを心得た
 将門は、轡くつわを聯つらね馬を飛ばして突撃した。下野勢は散ちに駈散けちら
 されて遁迷ひ、余るところは屈くつき竟やうの者のみの三百余人となつ
 た。此時天意かいざ知らず、二月の南風であつたから風は變じて、

急に北へとまはつた。今度は下野軍が風の利を得た。死生勝負此の一転瞬の間ぞ、と秀郷貞盛はおほわらは大童になつて鬪つた。将門も馬を乗走らせて進み戦つたが、たま〜どつと吹く風に馬がおどろいて立つた途端、猛風を負つて飛んで来た箭やは、はつたとばかりに将門の右の額に立つた。憐れむべし剛勇みづから恃たのめる相馬小次郎将門も、こゝに至つて時節到来して、一期三十八歳、一燈たちま忽ち滅きえて五彩皆空しといふことになつた。

本幹すで己に倒れて、枝葉まつた全からず、将門の弟の将頼と藤原玄茂とは其歳相模国で斬きられ、興世王は上総へ行つて居たが左中弁将末に殺され、遂高玄明は常陸で殺されてしまひ、弟将武は甲斐かひの山中で殺された。

将門むすめの女ぢざうで地蔵尼にといふのは、地蔵菩薩ぼさつを篤信あつじんしたと、元亨げんかう
 釈書しやくしよに見えてゐる。六道能化のうげの主を頼みて、父の苦患くげんを助け、
 身の悲哀を忘れ、要因によつて、却かへつて勝道を成さんとしたので
 あると考へれば、まことに哀れの人である。信田しのだの二郎将國まさくにと
 いふのは将門の子であると伝へられて、系図にも見えてゐるが、
 此の人の事が伝説的になつたのを足利期に語りものにしたのであ
 らうか、まことにあはれな「信田しのだ」といふものがある。しかし直
 接に将門の子とはして無い、たゞ相馬殿の後としてある。そして
 二郎とは無くて小太郎とあるが、まことに古樸こぼくの味のあるもので、
 想ふに足利末期から徳川初期までの多くの人の涙をしぼつたも
 のであらう。信田の三郎先せんじやう生義広も常陸の信田に縁のある人

ではあるが、それは又おのづから別で、将門の後の信田との関係はない。義広は源氏で、頼朝の伯父である。

将門には余程京都でも驚きおびえたものと見える。将門死して二十一年の村上天皇天徳四年に、右大将藤原朝臣が奏して云はく、近日人 故平将門の男なんの京きやうに入ることをいふと。そこで右衛門督朝忠に勅して、檢非違使をしてさが捜し求めしめ、又延光をしてみつな満仲か、義忠、春はる実等さねをして同じく伺うかがひ求めしむといふことが、

扶桑略記の卷二十六に出てゐる。馬鹿 《ばかく》しいこと

だが、此の様な事もあつたかと思ふと、何程都の人 が将門おびにおびえたとかといふことがうかがひひし窺うかがひひし知られる。菅公おびにおびえ、将門おびにおびえ、天神、明神は沢山に世まつに祀まつられてゐる。此中に考ふべきことが有

るのではあるまいか。こんな事は余談だ、余り言はずとも「春は紺より水浅黄よし」だ。

(大正九年四月)

青空文庫情報

底本：「筑摩現代文学大系」3 幸田露伴 樋口一葉集」筑摩書房

1978（昭和53）年1月15日初版第1刷発行

1984（昭和59）年10月1日初版第3刷発行

入力：志田火路司

校正：林 幸雄

2002年1月25日公開

2009年9月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

平将門

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>